

第三節 縄文時代

1 縄文時代

縄文時代は竪穴の住居に住み、縄目のついた土器と石器を使い、魚類・けもの・鳥などを獲り、木の実や自然の草・根などを食べて暮らしていた時代である。一口に縄文時代といっても非常に長い期間であつて、大凡一万年位前から七千年程続いたといわれている。この長い期間の事がらを、土を掘り、土器や石器などによって判断しようとするのであるから、非常にむずかしいことであり、正確にこうであるとするのは至難のことと言わねばならない。しかし考古学という学問は、それを究める人達によって、徐々にではあるが、より細部に亘り、より具体的に人類の過去を明確にしつつ進んでいるのである。

2 白鷹町内各期の遺跡

白鷹町内の縄文時代遺跡で早期のものは発見されていない。前期のものは、土器片が数片確認されているが、【前期的なものとして】遺跡としては確認されていない。前期的土器片の見つかっているのは次の通りである。

蚕桑―白力沢 鮎貝―八幡及八幡台（『鮎貝の歴史』）

高岡―小四王原 十王―愛宕坂東 萩野―萩野浜

中期のものは最も多く、町内全域にわたって確認されている。

蚕桑地区―一四カ所 鮎貝地区―五カ所 荒砥地区―三カ所

十王地区―七カ所 鷹山地区―五カ所 東根地区―一〇カ所

後期の遺跡としては、東根地区に二カ所だけ確認されている。晩期の遺跡は晩期だけの遺物でなく、中期のものと一緒にあったり、古墳時代の土師器や、須恵器と混在しているところが多い。

蚕桑地区―六カ所 鮎貝地区―三カ所 十王地区―一カ所

東根地区―一カ所

以上各地区の遺跡を、各時期毎に大まかにひろってみたのであるが、荒砥の石那田と高岡の小四王原遺跡の外は、発掘による確認でなく、ほとんど表面採集の遺物によつての判別なので、必ずしも正確とはいい得ない。殊に後期遺跡の場合はもっと多いと思うが、確認されていないのである。

3 日向洞窟と宮遺跡

置賜地方縄文時代の草創期、早期の遺跡として、高畠町日向洞窟が知られている。この洞窟は昭和三十年第一次、昭和三十二年第二次と発掘が行なわれ、詳細は『高畠町史別巻考古資料編』にまとめられている。

遺物としては、上部より第四土層の中に縄文時代草創期を代表する数多くの隆起線文土器、押圧縄文土器、絡条、無文、爪形の各土器とそれらに伴なう石器、石片が出土した。また、自然遺物としてエチゴウサギやツキノワグマなど一四種の哺乳類骨、ハクチョウ・マガンなど一一種の鳥類骨、両棲類のヒキガエル骨、カワシンジュ貝など一〇種の貝類の出土を見ている。

洞窟内の第一、第二土層および洞前庭部よりの出土遺物には、縄文時代早期、同晩期の土器、弥生式土器、土師器須恵器も見られる。石器では矢柄研磨器、局部磨製石斧、尖頭器、断面三角形錐様石器、彫刻刀、植刃、曾根形石核、石鏃、搔器形石器、打製石斧、不定形石器、礫石器、敲石、凹石、磨石等で、石材は頁岩が圧倒的に多く、チャート、黒耀石、瑪瑙、玉髓、硬質砂岩等が用いられている。

以上のような出土遺物、出土層から見て、この洞窟は相当長期間にわたって住居として使用されたものであるらしく、縄文時代初期の文化を知る上で貴重な遺跡であるばかりでなく、洞窟住居の様相を知る上でも例の無い遺跡といえる。なお、高島地区の他の洞窟についても発掘が続けられており、貴重な遺物の出土をみている。

昭和三十一年、長井市十日町の新道で発掘が行われ、縄文時代中期の遺跡として発表された。遺物は長井市立図書館に陳列されている。ここは、最上川と野川をつくった段丘上である。出土遺物は縄文時代中期の土器が主で、石器の出土が非常に少ない。炉をもった五メートル前後の円形の住居址のようであったが、付近は既に住宅街となっているのでこれ以上のひろがりは確められなかったようである。また、長井市では泉地区の館ノ越遺跡も発掘し、宮遺跡に劣らない成果を上げている。

『長井の歩み』

〔大本7、大本7B、大本8〕

4 縄文時代人と住居

約七千年もの長い間、さまざまな文様をつけ、さまざまな形の土器と、石器を使って生きていた縄文時代の人達とはどんな人であったろうか。

『鮎貝の歴史』、『蚕桑の郷土誌』では、はっきりとア・イ・ヌ・人であると書いている。最近になって各地から縄文人骨が発見され、縄文人についての説は多様になってきており、『日本の考古学』〔鈴木義昌編 河出書房〕に依ると、今まで発見された人骨は、時期的に中期以降とくに後・晩期に多く、地域的には西部日本に多い。西部日本の縄文人は、

1、放射性炭素からの推定が正しいとすると、いまから約九〇〇〇年前から六〇〇〇年もの間、日本には縄文人と総称できる人々がすんでいた。

2、かれら以前に日本に先土器文化をのこした人々との間の関係は不明である。

3、身長はわれわれよりもやや低い程度で、大きな頭、ひろい顔をもち、その骨組みは頑丈であった。

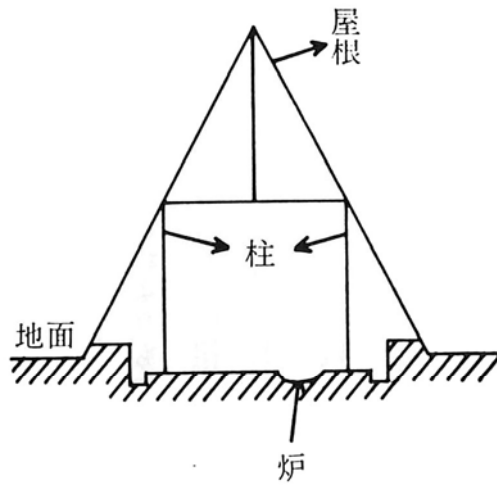
4、かれらはわれわれの祖先であり、つぎの弥生文化をのこした人々の大部分はかれらの子孫であった。

縄文時代人については以上のように要約される。

縄文時代のすまいは、一般に円形と、方形の竪穴住居であるが、高島町の日向洞窟・観音岩洞窟のように自然の洞窟を利用して住んだところもある。

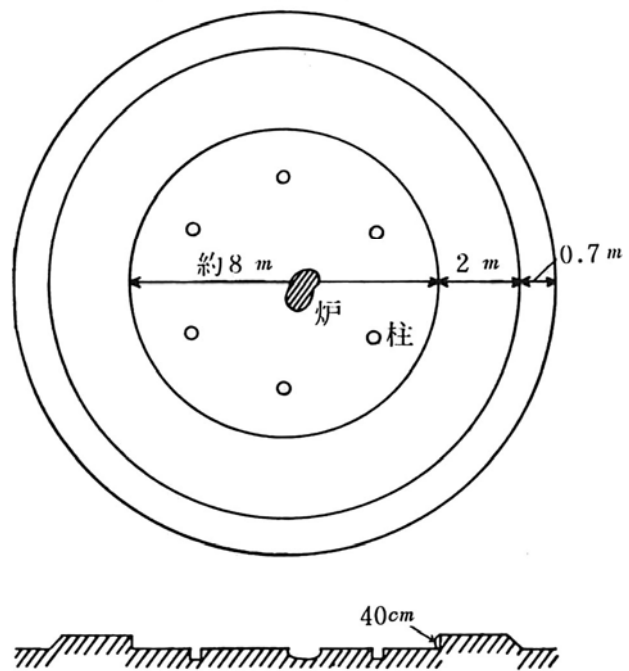
床面は地面よりも一段低くなっているが、昭和四十九年山形市で発掘された住居址〔松波遺跡〕は、地面よりも高く盛土されている。普通、柱は方形と円形で差はあるが四本く六本位のようなものである。木は栗・檜などが主である。屋根は、円形の場合は円錐形となり、方形の場合は合掌式に組みあわせられて切妻となる。材料には、茅・笹・木

第4図：縄文時代住居断面図



- ・ 太陽の方向と風向を考慮して出入口が設けられる。
- ・ 一人あたりの所要面積は三平方メートル位といわれる。

第5図：小四王原遺跡平面，断面図

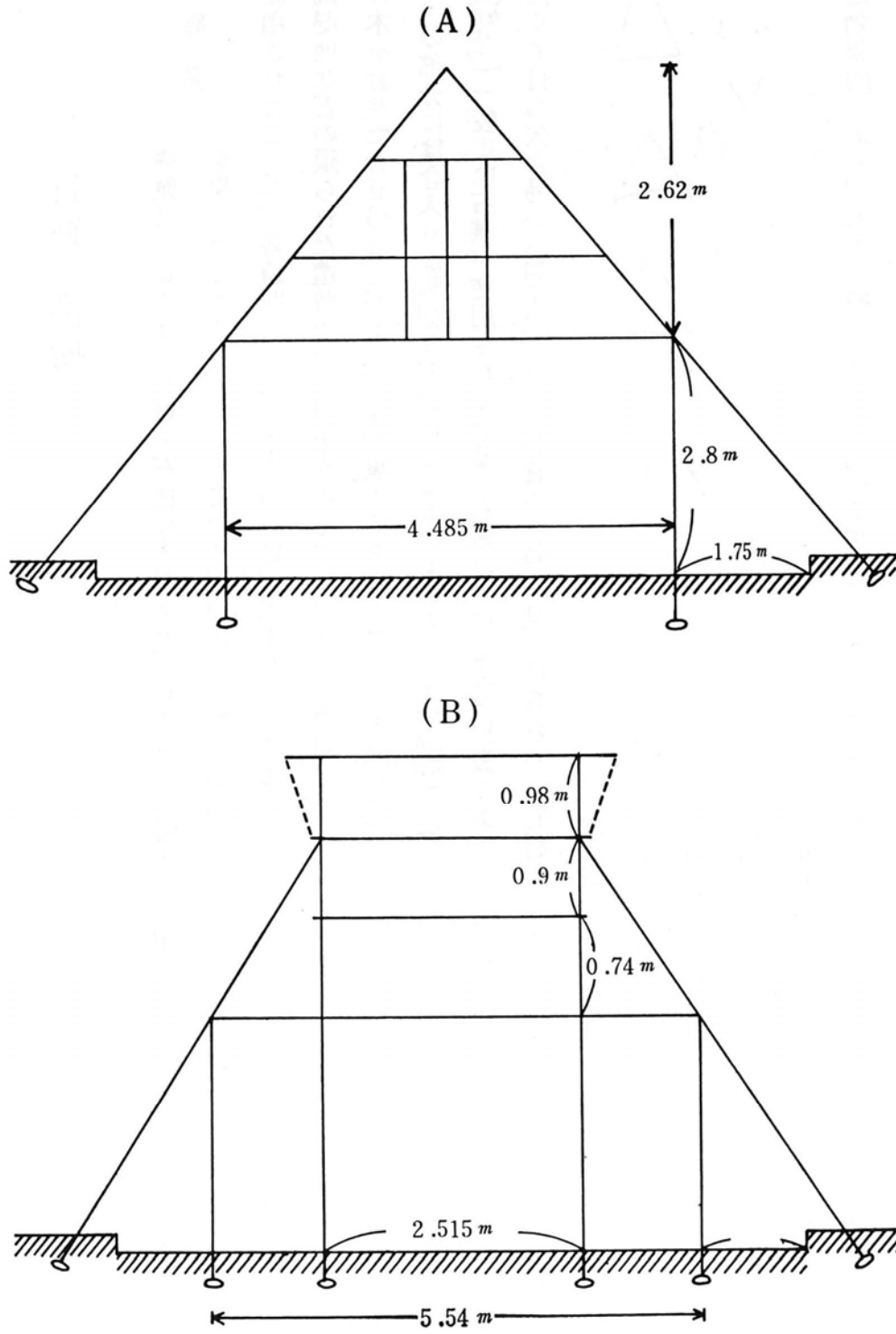


- ・ 一棟、木造茅葺き
- ・ 床面積 五〇平方メートル
- ・ 高さ 五・四メートル
- ・ 床面直径 八メートル
- ・ 工費 二五万円
- ・ 所要日数 一日

の皮などを利用したと考えられる。

昭和四十七年白鷹町教育委員会が、高岡小四王原遺跡を発掘し、その住居址に家屋を復元した〔平吹利数氏設計〕。復元家屋の略図は、第6図のようである。詳細については後述する〔本節第10項〕。

第 6 圖：小四王原遺跡復元住居構造圖



5 狩猟、漁撈

狩 獵 具

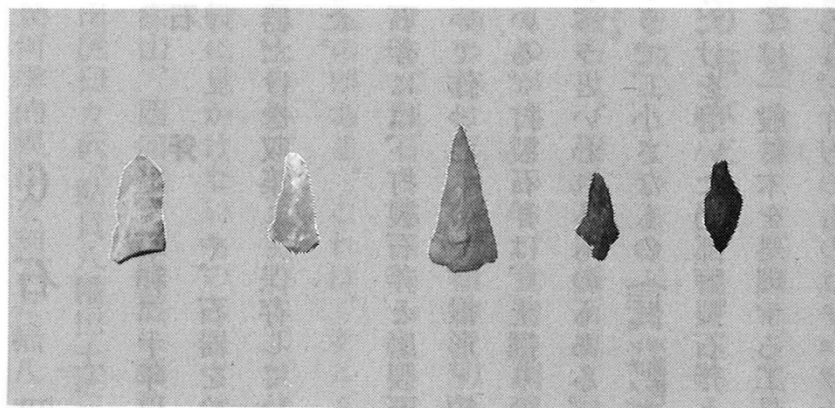
狩猟具としては、石鏃・石槍などがあり、石斧なども時として用いられ、狩猟には犬が大きな役割を果したであろうといわれている。弓矢は、狩猟活動では欠くことのできない道具であり、非常に多く使用されたことが、各遺跡からたくさん石鏃が出土していることで知られる。弓は、木又は竹で作られ、泥炭層や低湿地などの限られた遺跡でだけ出土をみるようである。発見された弓の中には、一本づくりの丸木弓と、二本以上の木を合せた合せ弓などがあり、朱や黒の漆を塗ったものも見られ、さらに桜の皮や糸を巻き、にぎりやゆはず（弓筈）の部分には念入りな彫刻などをほどこしたものもある<sup>〔青森県
尾川遺跡〕</sup>。鏃には、骨や、牙で作られたものもあるが<sup>〔白鷹町では見つか
っていない〕</sup>一般には石鏃が使用されている。石鏃は、ほとんど打製である。石材は、硬質頁岩^{けつ}が最も多く、黒耀石やかたくて打ち欠き易い（加工のし易い）石質のものも見受けられる。石材の全国的な地方

第7図：石鏃の形



差としては、北海道は黒耀石が多く近畿地方や瀬戸内海沿岸ではサヌカイトとよばれる安山岩に限られ、東北地方は圧倒的に硬質頁岩が多く用いられている。石鏃の形は、さまざまに作られているが、有茎と無茎があり、有茎の

ものは、無茎に比べて着装に効果的である。形の一般的なものは、第7図の通りであるが大小もさまざま、このように小さな鏃をどうして作ったのかと思われる精緻なもの、またこれが鏃かと驚くほど大きなものと、形・



第8図：石鏃（三浦文吉氏蔵）

大小と多様であり、獲物の種類によって、矢を使い分けしたのではないかと考えられる。石鏃は縄文時代を通じて、地域や時期によっても変化を見、竹なども用いられたのではないかと云われる。又、鏃を矢柄に固着する場合、天然アスファルトを利用した例が、東北地方の油田地帯で見られる〔青森県、是川遺跡〕。

弓矢は、獲物の骨につきささったまま発掘された例があり、又、人骨に突き刺さったまま発見されたものもある〔愛知県伊川津貝塚〕。

槍は、弓矢と共に重要な狩猟具であり、武器であり、縄文時代迄の早い時期には盛んに使われ、時代が下る程発見の数が少くなる。白鷹町でも各地で発見されていて、山口の中谷地・西田尻の白力沢・深山の西向・鮎貝の八幡台・十王の大豆田の各遺跡から出土をみている。石槍の石材は、石鏃と同様に硬質頁岩であり、時として槍だけでなく、短剣的な用途もあったのではないかと考えられる。

犬については、縄文時代の貝塚から骨が発見されており、家犬として飼育され、狩猟などにも用いられた〔愛知県吉胡貝塚〕。

漁撈具

漁撈は、狩猟と並んで生活上の大事な仕事であった。当地方の漁撈場は主として最上川であり、支流の小さな川も漁場であつたらう。漁具の主なもの、釣る道具、突き刺す道具、すくう道具である。

釣針は石、骨、角で作ったものが用いられ、魚を突き刺す道具ではモリ・ヤスが用いられた。すくう道具とし

ては網が最も有効で、網の使用は土錘・石錘の発見によって知られる。漁具の出土は、二カ所のみで鮎貝八幡、西田尻の高田である。種類は石錘だけである。

獲物は現在とあまり変りはなく、当地方ではサケ・マスが非常に豊富であったと考えられている。

6 石器

石 斧

昭和二十年以降小学校でも原始時代のことを教えられるようになったので、小さい子供が土器片や、石器を拾っているのを見かける。しかし以前は好事家が、形の整った石斧、鏃或は完形に近い土器だけを収集して保存していたようである。特に鏃・磨製石斧は、その整った形と美しさのためによく愛蔵されてきた。

石斧には、打製石斧と磨製石斧があり、その中でも打製石斧は形も種類も多い。打製石斧は、粘板岩や頁岩を打ち欠いて作ったもので、撥形・短ざく形・分銅形などがあるが、この形に属さないものもある。分銅形は後期に限られている。打製石斧は、土掘りの道具と考えられ、穴掘りや、球根類の採集などに多く用いられたのだらう。この内、石ベラといわれるものもある。磨製石斧は、チョウナとして使用されたものと、マサカリとして使われたものがあるようで、小さなもの^{〔三センチメートル前後〕}は、ノミとしても使われたのであろう。両頭石斧、多頭石斧、環状石斧、また刃の部分だけを磨いた局部磨製石斧とよばれるものもある。磨製石斧は、石質によっては非常に美しいものがあり、用途としては一般に木を処理する工具として使用されたようである。場合によっては、突く作業に用いられた場合もあるであろう。片刃のものはチョウナであり、両刃のものはマサカリとされている。石

斧は、打製・磨製とも白鷹町内各地の遺跡から多く出土している。

石皿・擦り石など

石皿は、平たい石の中央部にくぼみをつけて、植物の堅果をつぶしたり粉にする道具である。擦り石は、これと対に用いられ、時には平石も用いられたようである。擦り石は、長い棒状の自然石などを加工しているなど様々である。

敲石たたきは、擦り石同様石皿と対で用いられたものである。住居址には必ずといってよいほど球形か楕円形の握り易いものが出ている。食物の調理用具としては、石匕・石匙・石小刀とよばれるものがある。これらは木の皮剥ぎや、動物の皮はぎ、肉や植物を切るためにも用いられた。石錐は石器の尖端を錐状にとがせたもので、各地の遺跡で見かける。凹石と称されるもので、平石、丸石或いは炉辺に置かれたらしく焼け石などにも二個或は数個の凹部をなしたものがある。これは、クルミなどを割ったとか、火をおこすのに用いたとか云われている。以上の外に、頁岩でトピロ状に作られたものや、様々の形で、用途の推定ができないものが数多く見うけられる。一般に見かけないものとしては、次のようなものがある。

深山、西向出土の鎌形に調整されたもの一個。菖蒲中屋敷出土の三脚石とよばれているもの。用途は不明である。西田尻白カ沢、鮎貝八幡出土に耕作棒と見られるもの各一個がある。十王大豆田出土の、晩期と見られるが、各面全部に幾何学的模様を刻んだ幅八センチメートル、厚さ三センチメートル、長さ九センチメートルの石版の残片一個があり用途は不明である。西田尻西館出土の大石棒一個、おそらく県内でも大形の方であろう。長さ一メートル、太さ四〇センチメートル、重さ三〇キログラムの両頭石棒である。この種の石棒は生活用具としてではなく、信仰の対象として作られたと推定出来る。西田尻白カ沢の寺場と称するところで、半月形の尖頭器一個が単独で拾集されており、これは、高島地方では縄文時代前期のものとして確認されているので、他遺物の存在

を検討する必要がある。

7 土製品

土器

土製品の中で、最も数と種類の多いのが、日常生活用具としての容器である。各地の遺跡もそうであるように、縄文時代の時代区分は、出土層位と土器（片）によってなされている。それ程時代区分を知る上で重要な手がかりとなるのが土器である。種類・形・文様・土質・焼成度・厚薄多種多様である。

文様では、縄文時代の名の如く縄目文、これに似た文様の捺系文が圧倒的に多い。高島町日向洞窟出土などで早期とされているものに、隆起線文・爪形文・絡条体圧痕文・押圧縄文などがある。それ以降については、櫛目文・沈線文・刺突縄文・羽状縄文・擦消縄文、晩期になって工字文、各期を通じて無文、それに前掲の縄目文・捺系文等がある。これに渦巻をつけたもの、コブのついたものなどもある。底の種類は尖底〔早、前期に限られて〕・丸底・平底があるが、平底は最も一般的で数が多い。台付の土器もある。形としては、壺・甕・円筒・鉢・皿などが主で、時代が下ってくると片口・注口などが見られるようになる。又、小壺や急須のような日常品も作られている。土器の口縁部に、さまざまな形の飾りをつけたものが、縄文時代中期になって全盛を極める。本町の遺跡の中では、荒砥石那田・高岡小四王原・横田尻生ノ原などの遺跡に片鱗が見られる。その精緻さ、豪華さ、美しさは眼をみはるものがあり、如何にして縄文人がこのように偉大な芸術作品を成しとげたのかと感服するばかりである。

土製品全般を通じて、焼成度は、いわゆる素焼の段階であって、窯は作らず野焼きで、七、八百度の熱度である。土質は赤粘土・青粘土である。土器全般の用途は日常飲食器、液状容器、クルミ・栗などの食料の保存容器、

煮沸器、祭祀用器などに用いられ西田尻臼カ沢遺跡からは土器と共にクルミの炭化したものが出ています。時折土器片の内側に油脂性の炭化物がこびりついたものを見ることがあり、外部にス・スの付着したのを見かけることがある。土器の大型のものは、高さ七、八十センチメートルもあり、移動には不便と見られるので、貯蔵容器として用いられたものであろう。高岡小四王原遺跡の第一次発掘地の炉下より出た土器片を推定復元したところ、約六〇センチメートルの大型のものになった。土器の中で、日常生活用品としては似つかわしくないもの、即ち口縁部に豪華な装飾を施したものなどは、祭祀の供物用に用いられたのではないかと考えられている。

土 偶

土偶のもつ意味は、いろいろに云われているが、呪術的なものとして崇拜され、信仰的な行事に、ときには葬制にも関係したと考えられる。町の遺跡では土偶の出土は非常に少ない。鮎貝八幡遺跡から出土したものがあつたが、現在行方不明である。西田尻臼カ沢遺跡出土の土偶は小さなもので、頸部が打損し頭部のみに過ぎず、耳飾りの文様を施しており、下部片と肩部のもので、肩部〔腕部を表したものが〕の両面に難解な文様が施されている。荒砥石那田遺跡出土のものは山形大学にある。

8 食料・衣料・信仰

縄文時代人の食料には、日向洞窟に見られる獣・魚・鳥の外、食用となる動物はすべてその用に供されたことであろう。海岸地方では、多く貝が食べられたが、当地方ではカラスガイ・シジミ程度である。山野に自生する食料ではクリ・ヤマモモ・トチ・ドングリなどの小さな木ノ実である。草根類については、ユリ・ヤマイモを始めとして、現在山菜として採られているものは当然食べたであろう。とりわけ山ブドウ・アケビなどは珍重され

たのではなからうか。

縄文人の身にまとったものは、腐れ易い性質上発掘される例は少い。一般に木・草からとった繊維、クマ・シカなどの皮、又、魚皮なども利用された〔北海道に多い〕。縄文時代を通じて編物のあったことは、土器につけた縄目文や燃糸文などからも判断されるが、北海道や宮城県などで出土している〔宮城県山王遺跡〕。

当地方では今のところ見つからないが、環状列石と称されるものや、立石（立棒）などがある。土偶や西田尻西館からの出土品大石棒などは、何等かの信仰の対象物である〔この石棒は、水田の排水工事の際の単独出土なのでこれ以上のことはわからない〕。

9 気 候

次に、縄文時代の気候について、山形大学柏倉亮吉名誉教授の『遺跡と気温』に依り当地方をみることにする。

「氷河時代の寒冷から暖かい方へ気温が方向転換したのは、縄文時代早期後半のことだという。暖かくなれば氷が融けて海面が高くなる。こういうことを実証しようとした試みがある。関東地方を舞台として行なわれた貝塚の分布調査である。

貝塚はもともと海棲の貝類を人類がとって肉をたべ、殻は付近に棄てた。その堆積のあとである。だから本来は海岸から程遠からぬ所にあったはずだ。ところが、現実には分布を見ると、ある貝塚は今も海岸からかなり奥地にある。例えば湯野山貝塚〔茨城県結城郡石下町〕は犬吠岬から利根川をさかのぼること一〇五キロメートル、標高三〇メートルの高みにある。遺物から見ると縄文前期のものだが貝殻の九〇パーセントがヤマトシジミである。そのヤマトシジミは満潮期に潮のさす河口のような場所を生息地としているから、縄文前期には、その高さの所迄、海が

進んでいた（海進）ということになる。こうなると、関東地方の現沖積平野の大部分が海面下に没していたことになる。そしてこの時期（縄文前期）を境にして、海進は止まり、以後は海面が順次低下し、奥深く湾入した海岸線も次第に後退を始め、現代の海岸線まで後退を続けてきた。

山形県では、表日本のような遠浅でないからか、貝塚はごく少く吹浦遺跡だけである。ここは標高二〇メートルそこそこの丘陵に淡水産のシジミを主とする貝塚である。点在する貝塚の数々をつなぎ合せて古海岸を出すという好プレイはできない。しかし貝塚と関係なしに、遺跡一般の立地に目をつけると、やはり面白いことが出てくる。面白いことは、県内の大抵の地域で、標高の高い所に縄文前期の頃の遺跡があるという事実である。

たとえば、置賜平野をめぐる山地では、板谷近くの高野原（六五〇メートル）、松川上流の渋川（五四〇メートル）、大平（四六〇メートル）、南陽市の大野平（四五〇メートル）は最も高度の高いものだが、これらは縄文早期、前期、中期前半の遺跡である。村山平野周辺では、黒伏山中腹の標高八〇〇メートルのところ遺跡があるということだが、同じ高さの蔵王温泉の遺跡は確か縄文中期と聞いている。上山西方山地の黒森（六四〇メートル）、出口（六〇〇メートル）の両者は前期のもの、白鷹・山腹の獄原は（六四〇メートル）中期前半である。最上地方の最高位が小国川をさかのぼった鍋倉遺跡（三五〇メートル）が中期であり、庄内地方では田麦俣（五六〇メートル）を例外として櫛引の天狗森（三六〇メートル）の中期、鶴岡市の河倉（三二〇メートル）の前期が地方での最高位置にある。

つまり、縄文前期頃の遺跡が地域では一番高い所にあつて、他の時代の遺跡を眼下に見下している形である。いい換えれば縄文早期から中期初頭の人たち……代表していえば縄文前期人……が一番高い所迄居住地として選んでいたということになる。

ここで仮りに現代の気温の常識を当てはめてみよう。山に登って一〇〇メートル高くなれば気温は約〇・六度

低くなる。だとすると、高野原遺跡〔六五〇メートル〕では今の置賜平坦地〔一五〇メートル〕より平均で三度低い気温だという計算になる。

そういう高原野での生活を可能にしたものは何であったか。生活物資の豊富さという点もあろうけれども、その奥にひそんで大きいのは気温が高かったという自然条件ではないか。地質学者がそれについて、当時〔縄文時代〕の気温が今よりも摂氏二度程高かっただろうといっている。数値的に余りにもびったりし過ぎてこわいようだが、まさしくうなずかれる話である。

これらの高位遺跡のあるものは、終戦後、外地引揚げ者に対する開拓地に割当てられた。

それらには低地に余裕がないということから半強制的なものがあつただろうが、その高地に何らの強制なしに住居を構えたのが縄文前期人であつた。そういう高地居住の現実の裏に、気温的要素が考えられるのではないかといいたいのである。〔傍点
筆者〕。

10 白鷹町内の遺跡について

白鷹町内の縄文遺跡については、第一節の中で概要を述べたが、町内で最初から遺跡調査の目的で発掘されたところは一カ所もなく、石那田遺跡は荒砥高等学校敷地整備中に発見し発掘調査されたものであり、小四王原遺跡は町営水道浄水場建設の際発掘調査されたものである。他の遺跡は開墾、耕作、排水工事等によって出土した遺物を表面拾集したものである。当然一遺跡の遺物が一カ所に全部まとまっていることはほとんどない。

最上川左岸の遺跡は、二八〇〜三〇〇メートルの山麓地帯、第一湧水地帯、最上川河岸段丘上に分けられる。

この内小四王原、八幡は出土面積（居住区域）の広さでは群を抜き、特に八幡の遺物は複数の時期に及んでおり、縄文時代を知る上に貴重な遺跡である。又、縄文の遺物に混って、土師器や須恵器も見られる遺跡がある。〔八幡、西向、飯詰、八幡台、中町西の各遺跡〕今後注意して見る必要のある遺跡としては、石器・石片だけがあつて土器片の見つからないところで、一応縄文遺跡としてあるが地層ロームであることから尚精査しなければならぬ。〔上ノ台、唐松B、風袋、中善寺平、赤坂の各遺跡〕。

従来、高玉地区で遺跡の発見がなかったが、その後、東高玉地区で二カ所確認できた。八元田遺跡〔弘化三年一八四六の〕は、等高線二一〇メートル河岸段丘上で、改田の際縄文期の土器・石器と須恵器片が多数収集された。また、地主の話では窯跡らしきものもあつたという。南田遺跡は、等高線二〇〇メートルの河岸段丘上で大鮎貝沢左岸になる。縄文晩期末の土器片が基盤整備の際多数収集された。東高玉地区の最上川河岸段丘上では、今後尚遺跡の確認される可能性があるので注意してみる必要がある。

最上川右岸地帯は、河岸段丘や扇状地の発達が非常に貧弱なため、最上川にそそぐ小川のほとりに遺跡のあるのが特徴である。ただ萩野村松平〔五八〇メートル〕や、浅立八カ森〔三〇〇メートル〕は高所にあり、しかも萩野浜では前期的特徴をもつ土器片が見つかっている。当地方としては早く拓けたと見られている十王地区には、縄文時代にも住み易い場所であつたらしく、比較的遺跡の数が多く、縄文中期、晩期、土師器と混合しているところもある。〔大豆田〕。特別な遺跡としては畔藤岡の台がある。この場所は標高一九〇メートルほどの低地で、現在では河岸段丘と最上川の中間平地である。最上川右岸地帯としては珍しい場所である。

最上川を下って川巾のせまくなる峡谷部下山、佐野原、大瀬方面では、遺跡としてはっきりと認めることは難しいが、僅かながら石器片等の拾集でその痕跡を知り得る。昭和四十九年左岸にある白鷹町と朝日町の境の橋（堺橋）工事の際、朝日町分で遺物の出土をみており、右岸に於ける遺跡の存在を想起させる。

蚕桑
地区

蚕桑地区の縄文遺跡は、現在のところ一八カ所^一で、その外に石器等の単独出土地が六カ所ある。大まかに言えば山麓地帯、第一湧水地帯、最上川河岸段丘上に分けられる。山麓地帯は標高二八〇

三〇〇メートルの地帯で、臼力沢では前期的特徴を持つ土器片と石器が僅か含まれ、上ノ台では土器は発見できず石器だけで、この中に無土器時代のものではないかと見られるものが一個あるが、その他は全部中期の遺物である。第一湧水地帯遺跡の遺物は、一部を除いては後期く晩期のものと見られる。最上川河岸段丘上の遺跡は四カ所見られるが、中町西は縄文と須恵器が混在しており、生の原は中期のみのものである。各遺跡共に耕作、開墾等による表面採集なので、これだけでは判定し難いが、収集された遺物では以上のことが言える。単独出土の中で注目したいのは、臼力沢出土の半月形尖頭器と見られるものである。高畠方面では前期遺跡に出土が確認されているので、前期的特徴をもつ土器片もあることから尚注意して見る必要があるところである。その他は打製石斧〔土掘り具と見られる〕と両頭石斧などである。

尚、第一湧水地帯の遺跡は、大部分が後期く晩期であることは、縄文時代人の生活の変化を知る上の手がかりとなろう。

(1) 西田尻 十二堂遺跡

標高二七〇メートルほどのところにあつて畑地である。遺物の表面採集だけで知られた遺跡である。採集された遺物も散逸したものが多し。縄文中期の遺跡で打製石斧・石鏃・石匙などが拾われており、土器片は一〇アール余りの広さで採集され、集落址を見ることができ。川のほとりではないが、山より流れ出る水を集め易い低地となっているので、水に不足はなかったところである。尚手作業による古くからの畑地で桑園が主なので、その深部は今のところ壊されることはないであろう。直ぐ近くに名利瑞竜院がある。

(2) 西田尻 山ノ神遺跡

十二堂遺跡の北方にあたり、標高約三〇〇メートルのところ、展望のよい地点で傍らを上ノ山沢が流れている。一部ブルドーザーによって破壊されたが、約半分は畑地として遺物の表面採集ができる。これまで採集された遺物はまとまっていない。打製石斧・鏃・石匙などであるが、径三センチメートル、長さ六センチメートルある半折の六方石が一つ拾われている。石器として使用したものかどうか不明である。縄文

中期遺跡と見られる。

(3) 西田尻 高野の七遺跡

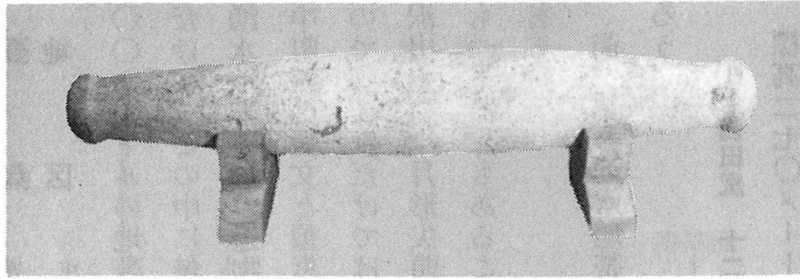
現状は宅地であって、表面採集によって遺跡と知られたところである。山の神遺跡より約八〇〇メートル下流のところ、出土した遺物は磨製石斧・打製石斧・石匙などで、若干の土器片もあり縄文中期と見られる。家主の話によれば、耕作の際「カメ」らしきものが土中にあつたが埋めてしまったとの事である。また、土偶の一部もあつたが他人に貸したままになっているとの事である。

(4) 西田尻 大神宮前遺跡

標高二四〇メートルの等高線の通つているところで、現在は水田になっていて遺跡として知られたのは、昭和三十年当時の排水工事の際である。遺物は土器数片で、縄文晩期と見られる。十二堂遺跡からは約七〇〇メートル離れている。

(5) 西田尻 西館遺跡

先述したように〔本⁸項節〕、排水工事の際に出土した単独物である。第10図の如く両



第10図：金沢寺石棒

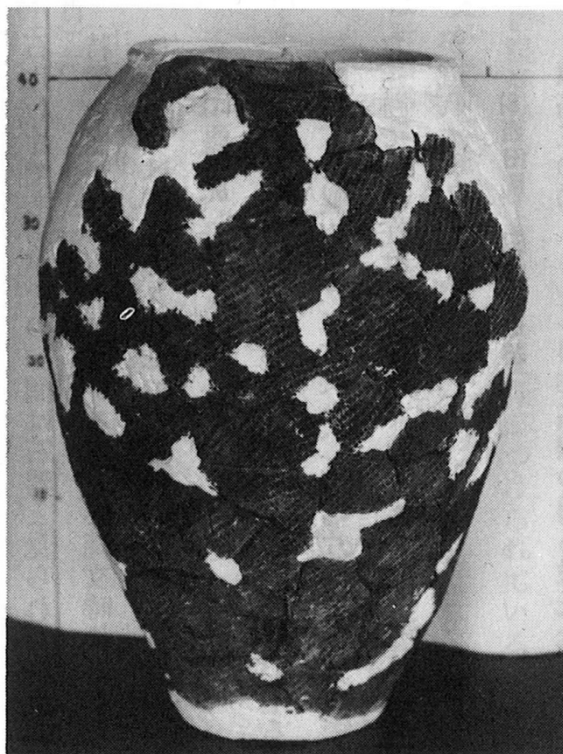
頭の石棒であって長さ一メートル、最太周四〇センチメートル、重さ三〇キログラムで花崗岩系の石質である。この種のものでは全国でも大きい方に属する。現在は水田であるが将来基盤整備が行われる際は、出土する遺物に注意する必要がある。等高線は大神宮前遺跡と同じで二四〇メートルの線であり、第一湧水地帯であるところから、縄文中期後半かそれ以降と見られる。尚、この種ものは日常生活用具としては不適であり、何らかの信仰対象物か祭祀用と考えられる。

(6) 西田尻 上ノ台遺跡

標高三〇〇メートルのところ段丘となり上ノ台公園の入口になる。道路整備によって現われたローム層の中

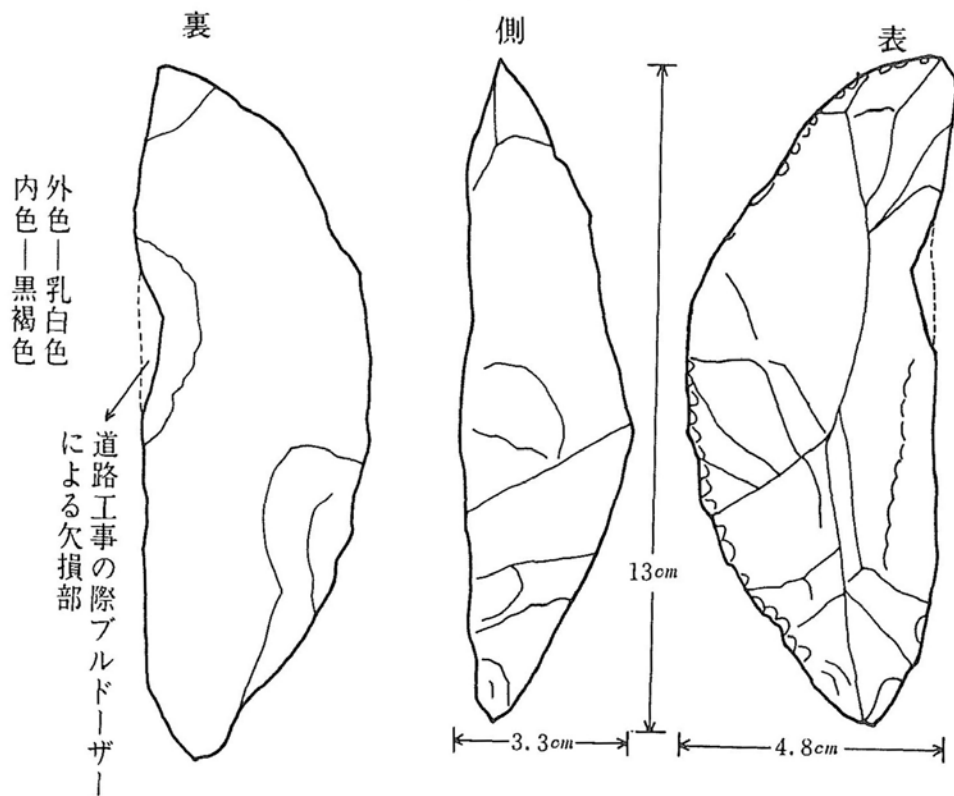


第11図：凹石（一ノ坂遺跡）



第12図：土器（白カ沢遺跡）

第13図 半月形尖頭器



に含んでいたもので、土器片は今のところ見つからない。頁岩石片数片であるがその一個は石器と見られ、無石器時代の特徴を僅かながらもっている。一応縄文時代としたが時期については確定できるまでの資料がない。

(7) 西田尻 一ノ坂遺跡

上ノ台遺跡と同じ三〇〇メートルの等高線の通るところで凹石、打製ナイフ形石ベラ、土器片等表面採集で知られた遺跡で、現在はスキー場になっている。傍らの中ノ山沢が流れている〔ブルドーザ―整備〕。

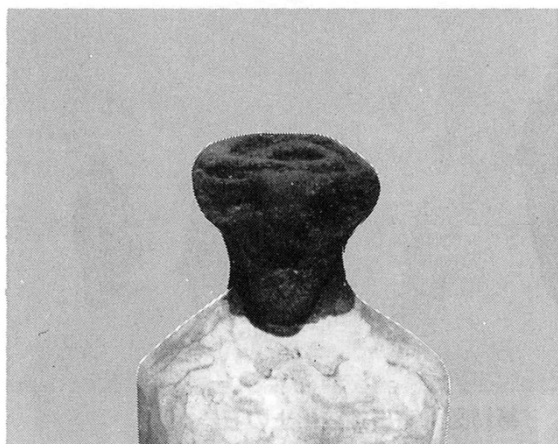
(8) 西田尻 臼力沢遺跡

標高三〇〇メートルの等高線の通る段丘上と段丘下で、三ノ四の住居址よりなる集落と見られる。臼力沢扇状地の上部に当り、臼力沢が流れている。終戦後の開墾によって知られ、遺物も多く小四王原遺跡と並んでその遺物がまとめられているところである。遺物は

縄文中期の土器、石器がほとんどであるが、前期の特徴といわれている羽状縄文土器片が一個ある。又、この住居址地点より約三〇〇メートル上流の段丘上寺場で、半月形尖頭器と見られるもの一個が発見された。この半月

尖頭器は、高島方面では縄文早期～前期の遺跡といわれる日向第一洞窟などで発見されているものである。これ一個の単独出土では判定のしようがないが、注意すべき石器である。まとまっている遺物としては、次のようなものがある。

土器片 小・中学生によって拾われ散逸したのもも相当数あるが、まとめられているものは数百点にのぼる。文様は、撚糸文が大部分で櫛目文・無文・羽状文・それに馬高式らしい小片が一個である。又、口縁部近くに渦巻文を施したものが多い。底部は全部平底である。口縁部に華麗な飾りのついたものは割合に少なく、大形の波状口縁が僅かに見られ、又、取手のついたものもある。一般に甕形が多く、それに鉢形〔浅鉢の
中・小大〕、壺形も少し見られる。又、筒形のもの一個がある。

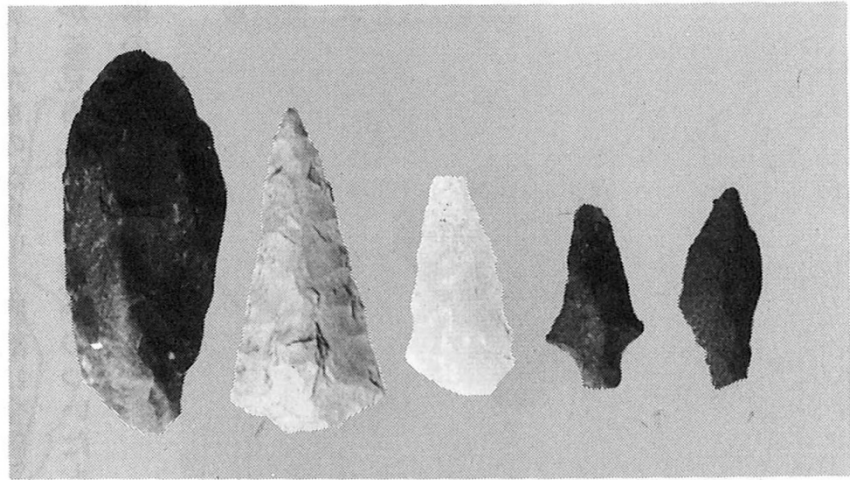


第14図：土偶（部分）白カ沢遺跡

土偶 折損した残片だけなので全体の姿は解からない。一片は首から上部で、頂上に渦巻があつて耳飾りの文様がつけられている。もう二片は、細かい撚糸文が全面に施され、肩〔腕をかたち
どつたのか〕の部分と底部の一部と見られ、肩部のものは折損部に繊維混入のあとが見られる〔ほぼ同様のものが深
山からも出ている〕。厚さは三センチメートルあり、全体としては大形のものようである。

石器 石器として形の整つたものは、次のようなものが出土している。

- 磨製石斧 三。打製石斧（石ベラ共）一五。
- 石ノミ 一。石槍 一。
- 石鏃 七。石匙 九。
- 石棒（半折）三。（この内一本は縦の擦痕あり）。
- 石皿 半割。平石 三。



第15図：高田遺跡出土の石器

擦石 三。

石ベラ兼用に刃部を利用したと見られるもの 二一。

嘴状のもの 一七。

ナイフ形に調整したもの 二。

敲石 五。 凹石 一。

石質は磨製石斧、石棒を除いては頁岩である。

その他の出土品としては、波状口縁をもつ櫛目文土器と共に、炭化したクルミ一個が出ている。

(9) 西田尻 高田遺跡

昭和四十八年水田を養漁池にするためブルドーザーを使用したところ、遺物が出て遺跡と判ったところである。標高二二〇メートルの等高線の通るところで、第二湧水地帯である。一ノ坂遺跡の傍を流れる川の下流にあたり、平坦なところである。遺物は縄文中期と見られる渦巻文が一個あるだけで、他はすべて晩期と見られるものである。土器は全部平底で、土器作成の際草を敷いて作業したのかその痕跡のついているものが一個ある。全般に薄手で、大形の甕形のものもあれば晩期特有の小形のものもある。この中に台付の小形土器三個、変ったところでは柄付土器一個、内面に脂性のもので煮たのであろうか厚くコビリ付いたもの二個がある。口縁部に飾りのついたものはなく、小さい波状のもの、二条縁のもの、平なものなどである。推定復元可能なものに円筒土器があつて、これは臼力沢遺跡に同形のものがあることより中期のものとするべきであろう。



第16図：土器片（生ノ原遺跡）

		（石器）	
磨製石斧	二。	梯形石ベラ	二〇。
有茎石匙	二。	石鏃	五。
石ベラ	一。	石錘？	四。
凹石	一。	敲石	六。
モモノタネ	二。		

この中で石錘として使用されたと見られるものが出てきたことは、網による漁があったことを知らせ、又、打製の梯形の石ベラの多いことも特徴的である。遺物の出土状況より見て、現地は二つの住居址と考えることが出

来、他の水田地にもまだあると思われる。石質は頁岩が大部分で、メノウ・玉髓・黒耀石が少量ある。

(10) 横田尻 生ノ原遺跡

最上川河岸段丘上で、標高二〇〇メートルの等高線が通っている。現地は両側を小川によって削りとられ、全く孤立した五アールほどの台地である。正しくは東生ノ原遺跡とすべきであろう。ここは大正年代から遺跡として知られており、試掘によって出土した遺物の多数は散逸している。しかし耕作によって出土する遺物によれば、縄文中期の遺跡であって、口縁部の装飾に見事な芸術性をうかがえる。かつて蚕桑中学校に、生徒によって持ち

込まれた土器の中に、下半分が五角形に形づくられ縄文を擦消しによって図案化したものがあつたが、蚕桑中学校と鮎貝中学校の統合移転の際紛失してしまっている。

(11) 横田尻 中町西遺跡

江戸期後半の寛政年間〔一七八九
一八〇〇〕水帳には「こししょう原」、「小塩原」などとなっていて、明治初期になって「中町西」と称されるようになった。

生ノ原遺跡より、約二〇〇メートル離れ、同じ等高線の最上川段丘上にあつて、臼力沢、中ノ山沢、本田沢等が合流した絹市川と上ノ山沢の下流とに挟まれた台地の遺跡である。現状は畑地と墓地になっていて、耕作による出土遺物では縄文中期・晩期の土器、石器をみる。更にこれは古墳時代のところで詳述するが〔第三章第一節第二項〕、少量の土師器片と相当数の須恵器片の出土を見ており、重複した遺跡である。遺跡は隣接する生ノ原遺跡がすべて縄文中期の遺物であるのに、ここの出土品は縄文中期の土器が少なく、大部分晩期と見られるものである。土器片の中には、内面に黒漆を塗ったものが数片ある。石器は割合に少なく、磨製石斧・鏃・頁岩石片などである。この遺跡台下にある金沢寺の所蔵遺物の中に打製石斧・磨製石斧・鏃・(アメリカ鏃もある)・完形の小形深鉢などがあるが、出土地が記されていないためはつきりしたことは不明であるが〔収集した住職は死亡〕、生ノ原遺跡、中町遺跡のものが含まれていることは間違いない。

(12) 山口 南沢遺跡

この遺跡は標高三〇〇メートルの等高線の通る山麓遺跡である。山道工事の際発見された遺跡で、遺物の数は少ない。打製石斧・鏃・縄文土器片などがあり、その一個に、臼力沢遺跡出土の土器で半球のものがあるが、これとまったく近似のものがある。縄文中期遺跡と見られる。

(13) 山口 柳力沢遺跡

終戦後開拓地として開墾された土地で、標高二六〇〜二八〇メートル附近の柳力沢扇状台地である。開墾当時、完形に近い甕形土器を出土した話を聞く。開墾や耕作の際収集された遺物は縄文後・晩期と見られる土器、打石斧などである。

(14) 山口 中谷地遺跡

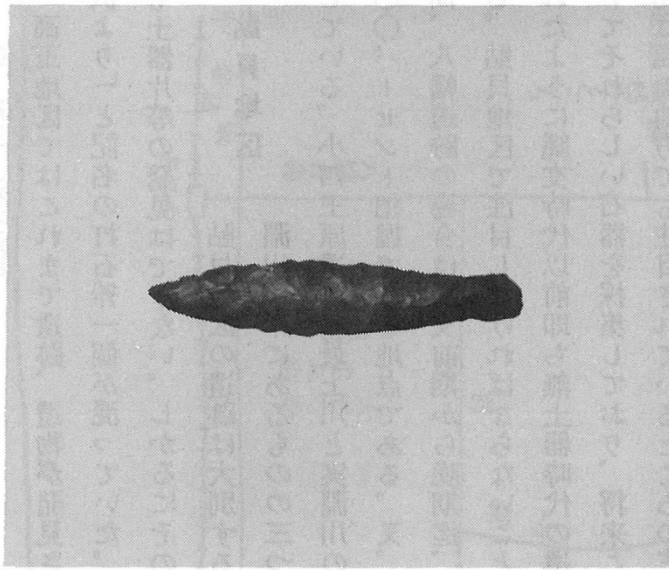
柳力沢遺跡より柳力沢の下流八〇〇メートルほどのところで、開墾によって発見された遺跡である。収集された遺物は形の整った石器が多く土器片は非常に少ない。石器では石槍二、有茎石匙三、石匙六、石鏃五で石槍は七センチメートルと一〇センチメートルである。縄文中期遺跡と見られている。

(15) 山口 中谷地北遺跡

この遺跡も柳力沢の水を利用した遺跡らしく、柳力沢扇状地の一部であって、開墾によって発見された遺跡である。遺物のまとまったものはないが、縄文中期と見られる土器片、打石斧、石ベラ等を見る。

(16) 山口 畑中遺跡

この遺跡は痕跡の微弱なところである。後述する鮎貝地区八幡遺跡に接続するのではないかとみられる。標高二一〇メートルの等高線の通るところで、遺物としては土器片、石ベラなどで縄文中期と考えられる。



第17図：中谷地遺跡出土石器（犬飼夏雄氏蔵）

(17) 高玉 遅沢遺跡

高玉地区ではこれまで遺跡、遺物が発見されていなかった。遺跡調査中、横田尻金沢寺所蔵の遺物中に「東高玉遅沢より」と記名の打石斧一個が混っていた。これは単独出土であろうからこれ以上のことはわからない。現地を見ても土器片等の発見はできない。しかるにその後、八元田と南田の二遺跡が確認された。

鮎貝地区

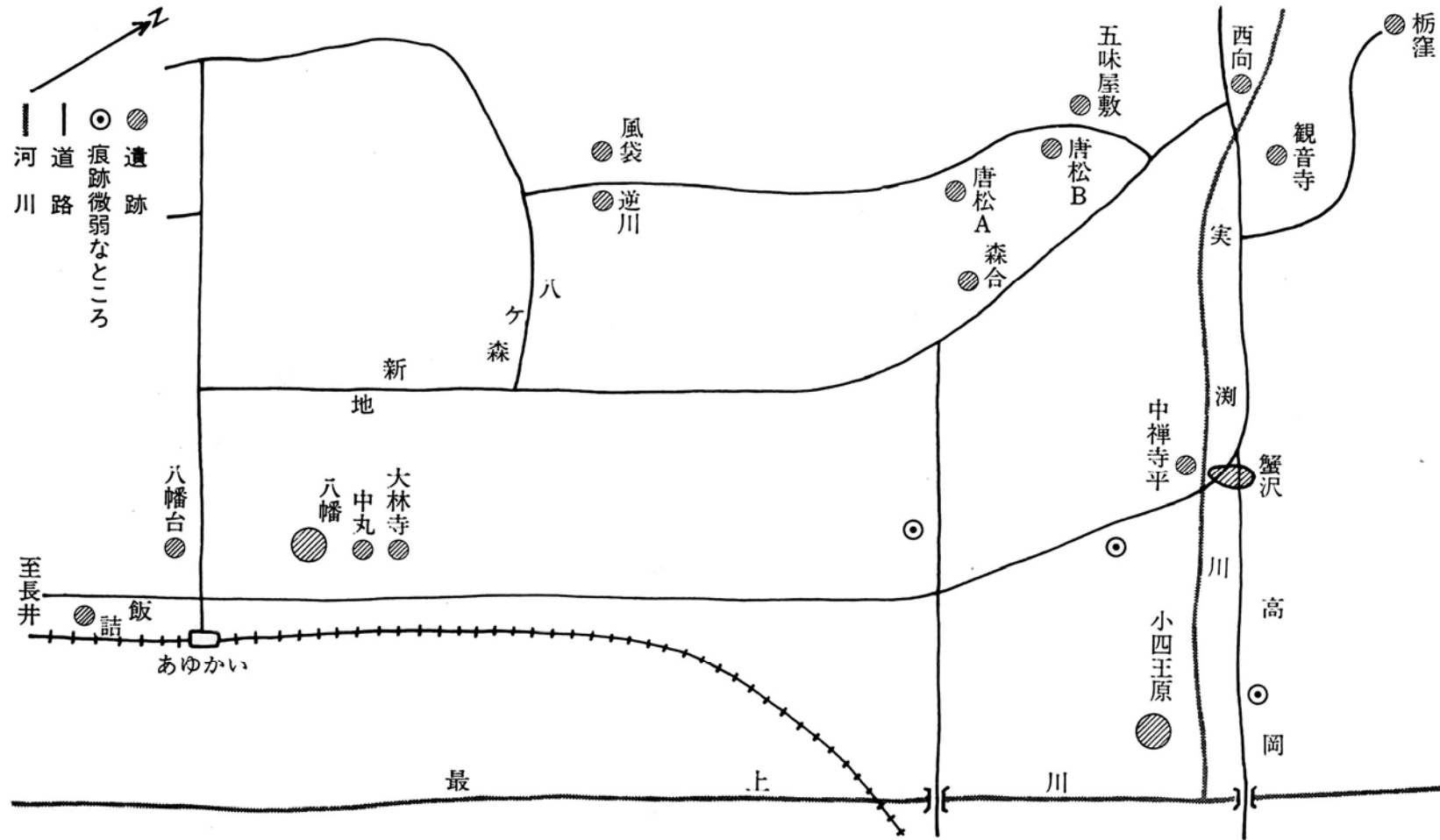
鮎貝地区の遺跡は大別すると最上川河岸段丘上にあるもの、唐松沢による扇状台地にあるもの、実淵川兩岸にあるものの三つに分けられる。このうち小四王原遺跡と八幡遺跡は、地形的に非常に近似している。小四王原遺跡は最上川と実淵川の合流点、八幡遺跡は最上川と八幡川の合流点というように、川の幸を一〇〇パーセント把握できる地点である。又、面積の広さにおいても町内の遺跡中でも群をぬいて大きいところである。尚、八幡遺跡の場合は縄文前期から晩期迄、続いて土師器の時代迄と長期にわたって利用されたところと考えられる。鮎貝地区で注目しなければならないことは、鮎貝小学校付近から唐松扇状台地に続く赤土層である。第二節で触れたように縄文時代以前即ち無土器時代の遺物、遺跡はこの赤土中にある。平吹利数氏〔東中
学校〕は鮎貝小学校前方においてそれらしい石器を採集しており、将来この地域において無土器時代の遺跡が発見される可能性を示している。遺物は他の地方でも注目されているところの三角面石槍や、木の葉形尖頭器、円錐形石核が出土しているので、この遺跡についても注意する必要がある。

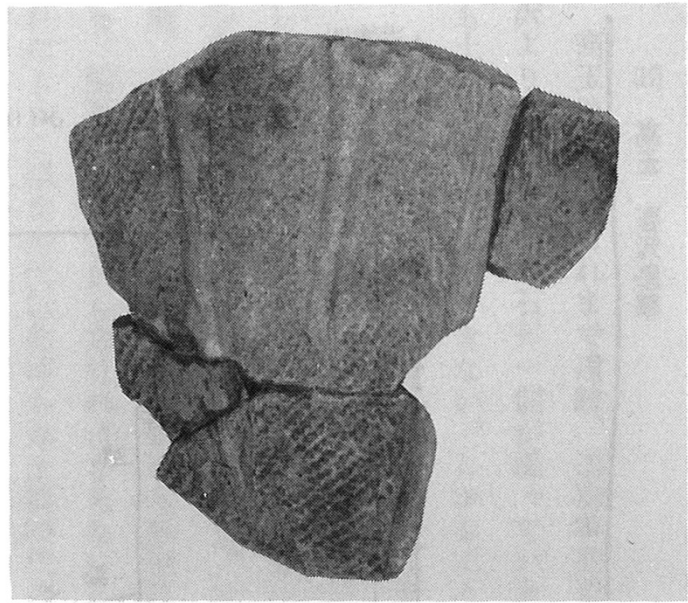
(1) 鮎貝 飯詰遺跡

最上川河岸段丘の突出部で標高一九〇メートルの等高線のところであり、国鉄長井線によって段丘が切断されている。遺物は縄文土器、土師器、須恵器などが収集され、重複した遺跡であるが縄文時代の痕跡は微弱である。

〔土師器、須恵器については古墳時代のところで述べる〕

第18図：鮎貝地区遺跡図





第19図：土器片（八幡台遺跡）



第20図：八幡遺跡土器（蒲生しう氏蔵）

期の特徴をもつ土器が出土したと記されているが〔「鮎貝の歴史」〕、現在は縄文中期の遺物と須恵器片が見られる。宅地造成の基礎作業によって出土した遺物の主なるものでは、中期土器片、石皿一、石錐一、石匙五、敲石一、石ペラ一、石鏃などである。深部は割合に攪拌されておらず、今後出土する可能性は充分にある。浅鉢一個が推定復元されている。

(3) 鮎貝 八幡遺跡

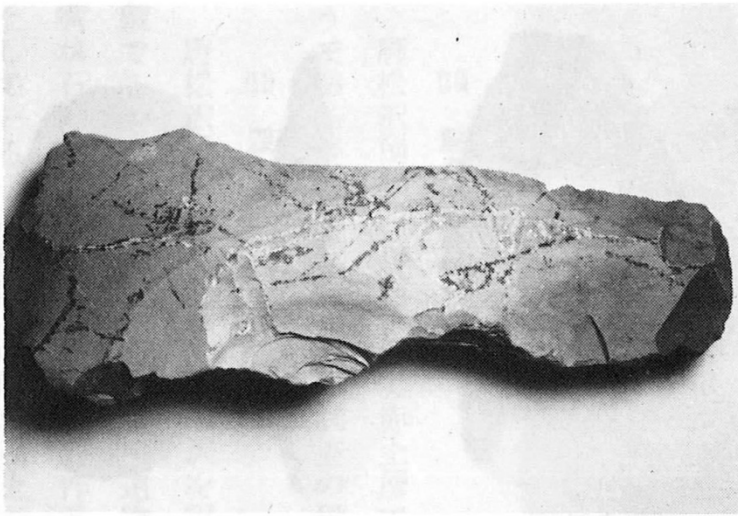
この遺跡はその面積の広さと時期が長く、縄文前期より晩期まで、又土師器の時期まで連続して見られるとこ

(2) 鮎貝 八幡台遺跡

(1) の飯詰遺跡

に続く二〇〇メートルの等高線のところで、畑地の耕作、続いて宅地の造成によってその遺物が多くまとめられている遺跡である。

以前には縄文前



第21図：石器（風袋遺跡）

ろである。最上川河岸段丘上で、(1)・(2)に続く等高線二〇〇メートルの台上である。又、段丘下には荒井沢・柳カ沢等山口方面の大半の水を集めている八幡川が流れ最上川に合流する。遺物は一〇〇メートル×五〇〇メートルほどの広さに散見採集される。散在してしまった遺物の全部について調査することはできないが、調査した範囲では中期土器片、磨製石斧（半折を含む）一一、有茎石匙一、石鏃一三、石棒（耕作棒？）一、完形石錐一、メノウ小塊三、黒耀石片二、炉辺凹石二、打製石斧、石ベラなどがある。晚期土器で復元されているものに鉢形土器二、皿三などがある。

(4) 鮎貝 中丸遺跡

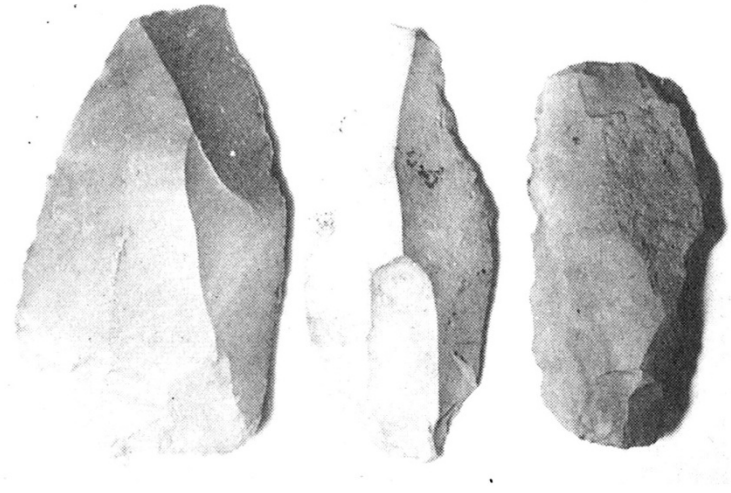
八幡遺跡と並んでいる最上川河岸段丘上の遺跡であるが、採集できる遺物が稀薄である。石ベラ、削器、土器片若干があるが、開墾時には相当採集されたという。

(5) 鮎貝 大林寺遺跡

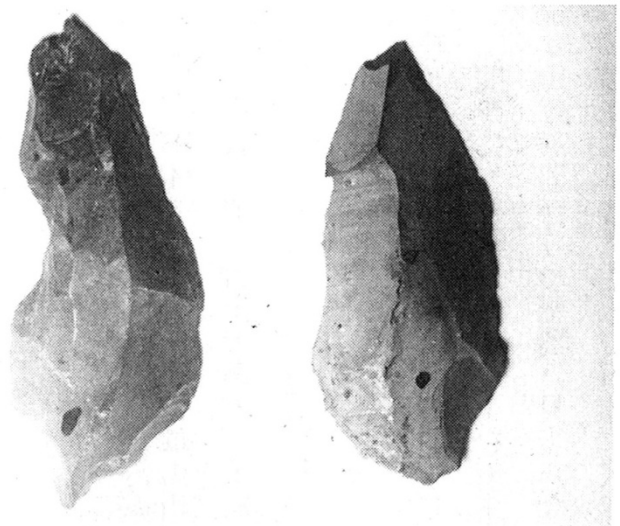
(2)・(3)・(4)と並んで一連の最上川河岸段丘上にあり、標高二〇〇メートルの等高線の通る台上である。土器片は今のところ一片も見つからず、頁岩石片だけで形の整った石器は見つからない。

(6) 鮎貝 風袋遺跡

唐松沢扇状地の西端と見られ、標高二七〇メートル前後の緩傾斜地である。開墾に当りブルドーザーを使用したため、詳細は明らかでない。表面採集では石器だけで土器は見当らない。石器は他の遺跡に比べて大



第22図：逆川遺跡石器



第23図：石器・唐松A遺跡

型のものが多いのが特徴的で打石器に限定され、作り方が非常に荒けづりで、打石斧・石ベラ・嘴状石器などが主である。

(7) 鮎貝 逆川遺跡

風袋遺跡の下方二〇〇メートル付近で、森合部落の西方にあたる。ここも(6)と同じく土器の採集は不可能で、石皿、嘴状石器、石ベラ、石鏃、搔器などで、変わったところでは三角面石槍が一個含まれている。

(8) 鮎貝唐松A遺跡

ホップ畑として開墾されたところであつて、標高三〇〇メートルの等高線の通る唐松沢扇状地の台地である。少量の土器片と石ベラ、嘴状石器、有茎石匙などをみる。縄文晩期と見られている。

(9) 鮎貝 唐松B遺跡

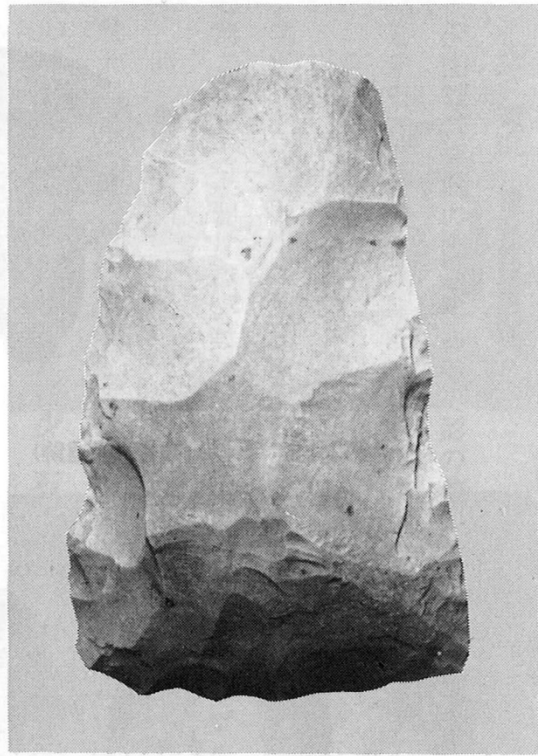
(8)と同じく三〇〇メートルの等高線が通る唐松沢扇状地の北端である。土器は見当らず石器だけで石ベラ、石鏃、嘴状石器などであるが、木ノ葉形尖頭器、円錐形石核各一個あるのが特徴的である。

(10) 鮎貝 森合遺跡

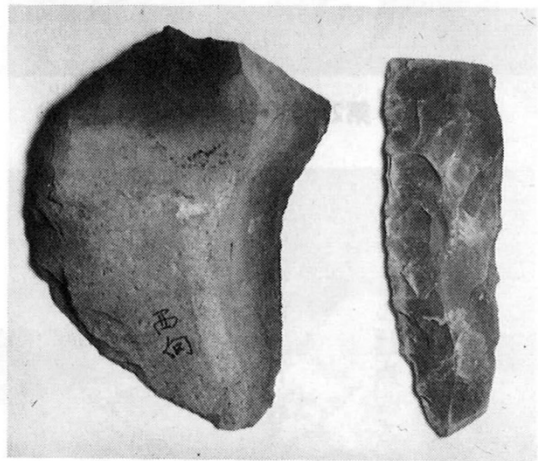
唐松沢扇状段丘の下部で赤土層である。この赤土は鮎貝小学校付近迄続いている。以前は中期土器の採集をみたようであるが、昭和三十七年調査の段階で既に散逸している。今では石ベラ一個と石片があるだけである。

(11) 深山 五味屋敷遺跡

唐松沢扇状段丘北端で唐松沢を隔てた凹地である。五味屋敷の地名の由来については不明であるが、中世武士の屋敷であったと言い伝えられる。遺物は土器片、石器であって、石器では形のままとまったものは少なく打製石斧、石ベラ、嘴状石器などであり、石器作製作業中にできたものと思われる石片二個（一体）がある。土器は完形に近いものが出土している。道路作りの際の出土で、出土地形は貯蔵穴を想像させる。地表より約一メートル



第24図：森合遺跡出土石器

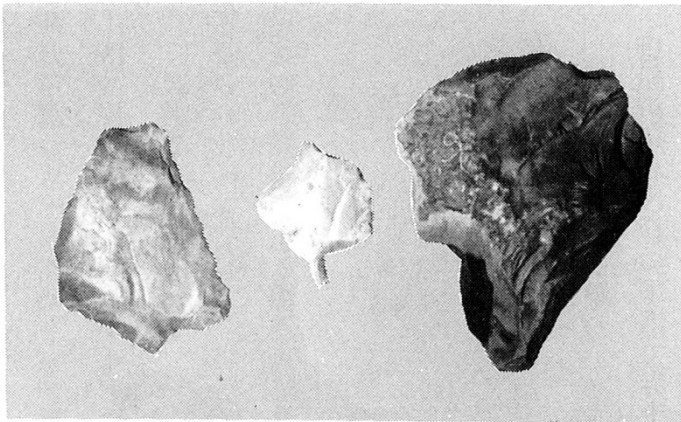


第25図：石器（西向遺跡）

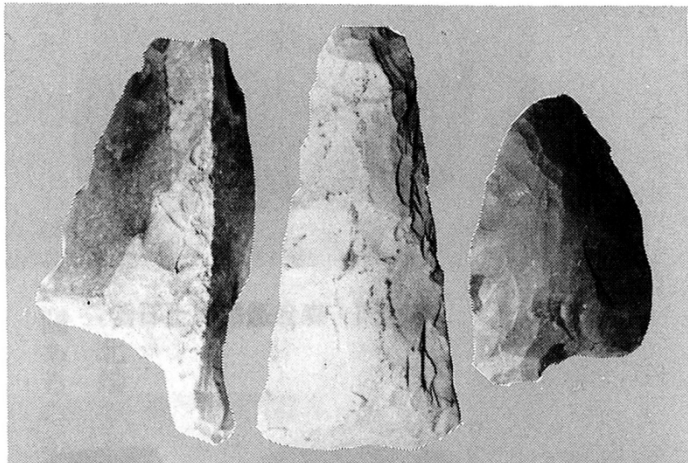
ル〔表土は浅く約三〇センチメートル〕、径一メートルほどに掘られ、底部に赤粘土を敷いてあった。この中より縄文晩期と見られる土器二個分〔一個はブルドゥーザリによって散乱し下半分だけ〕と石片が発見された。土器に限り縄文晩期と見られるが、遺跡全体の期別は判らない。

(12) 深山 西向遺跡

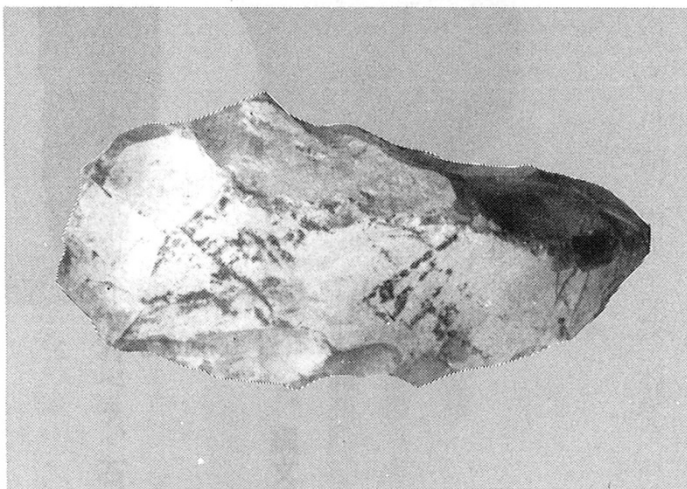
深山地区の北西部で、実淵川によって抉り取られた河岸段丘上である。突端部は中世期の館址或いは「チャシ」とみられるものがあり、土塁、壕に続いて縄文中期遺跡となっている。標高二五〇メートルの等高線のなすところである。縄文中期土器片、石鏃、石鎌、石槍、石ベラが出土する。



第26図：石器（観音堂横遺跡）



第27図：石器（中禅寺平遺跡）



第28図：石器（栃窪遺跡）

(13) 深山 観音堂横遺跡

深山観音堂側の山道にある。形の整った石器は数少ないが、頁岩石片が道に敷きつめたようになっていた所で、遺跡とするには疑問点はあるが、地形的に可能性のあるところである。石器と見られるもの数点ある。

(14) 深山 中禅寺平遺跡

実淵川右岸のローム層河岸段丘上である。標高は二五〇メートルほどのところで、遺物は石ベラー、石鏃一、嘴状石器二などで土器片は少数で、縄文中期と見られる。ブルドーザーによる開墾地である。

(15) 栃窪遺跡

最上川にそそぐ栃窪川の上流で、山あいの窪地にある栃窪部落の中心部で割合に平坦なところである。形の整ったものは採集できないが土器片僅少、石ベラー、石匙五などが確認できた。

(16) 高岡 小四王原遺跡

この遺跡については発掘、家屋の復元を担当した平吹利数氏の報告書があるので要約して掲載する。

① 発掘の経過

小四王原遺跡は以前から縄文時代の遺跡として、山形県の遺跡台帳に記載されておった。その遺跡台帳によると、縄文時代中期の大木9式と大木10式土器が出土していることになっているが、その後昭和四十二年この台地より縄文時代前期の大木4式土器が出土することが確認された。

昭和四十七年五月二十六日より、白鷹町水道課による町営水道の浄化槽工事がこの小四王原台地で行われ、ブルドーザーで整地の際多量の縄文式土器が出土した。そこで白鷹町教育委員会が中心となって、水道浄化槽工事の一部を工事区域から除外して発掘調査をすることになった。発掘調査は二回にわたって行われ、第一次調査は

五月二十七、八日の二日間、第二次調査は六月二十四、五日に行われた。第一次調査の結果住居址の存在が確認されたが、工事の際ブルドーザーで一部破壊されてしまっているため、完全な形の住居址の発掘ができなかった。第二次調査では、幸いにブルドーザーの削土が浅かったため、円形の縄文時代中期の住居址がほぼ完全なる床面を残した状態で発掘された。

② 遺跡の立地

最上川と実淵川によって形成された高さ〔水田と高〕一四メートルの沖積段丘が、小四王原第一地点の遺跡である。この段丘は海拔一九四〇―一九五メートルあり、表土より下四メートルが泥岩の岩盤で典型的な保護段丘である。第一地点の西南方約三〇〇メートルのところに、さらに一段高い段丘があり、そこから大木4式〔縄文時代前期〕の土器が出土している。小四王原第一地点の遺跡は、表土より約〇・四〇・五メートル下に、大木8b式、9a式、9b式、10式と四つの時期にわたって土器が出土する。

③ 遺跡の種類

縄文時代中期、大木10式の住居址

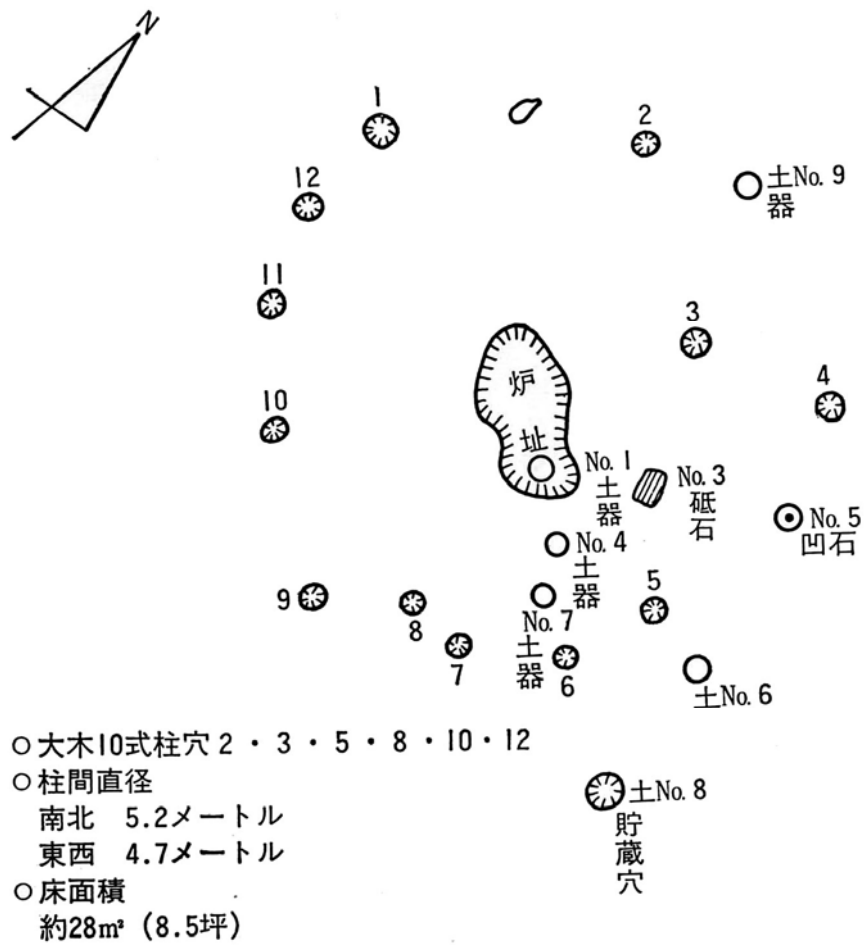
④ 出土遺物と年代

・ 土器

大木 8b 式土器	五片
〃 9a 式土器	三七片
〃 9b 式土器	四七片
〃 10 式土器	九二片

縄文時代中期で、今から四五〇〇年前の土器である。ほぼ中期全般にわたっての遺跡で、編年不明の土器片を含めると三六六七片になる。

第29図：小四王原遺跡第2住居址



・石器

凹石二、石皿一、磨石四、スクレーパー十数個で、形の整った石器の出土は一個もなかった。

⑤ 考察

第1住居址は一見方形のプランに見えるが、出土遺物よりこの住居址は縄文中期末の大木10式の住居址といえるから、方形と見るのは不自然であり、ブルドーザーにより一部柱址が破壊されたため、偶然にこのようになつたものと解するのがよいだろう。

第2住居址は、柱で囲まれる部分の平面が五・二メートル×四・七メートルの円形に近いものである。床面より出土する土器が大木9b式と10式で

あることから、二期にわたって使用された住居址と考えられる。このことは住居址の柱数が一二本もあり、この時期の建物は六本前後が普通であることから、竪穴部分を柱を別の位置に建てかえて再使用したと考えることができる。柱穴の形状より大木10式時代の住居址の柱穴は、六本と推定できる

⑥ 遺物

第1住居址

- 大木 8b 二、大木 9b 一五、大木 9a 二六、大木 10 五五、フレイク 二六一、スクレーパー 三一、コア 四、磨石 二、敲石 一、

土器文様では撚糸文・櫛目文・無文・三十稻葉並行・無節撚糸文などである。

第2住居址

- 大木 8b 四、大木 9a 二二、大木 9b 二一、大木 10 三七、フレイク 六一、凹石 一、磨石 二、石皿 一、敲石 二、

土器文様では櫛目文・撚糸文・無文・馬高式？な



第30図：小四王原遺跡 (A) 炉柱跡



(B) 発掘風景



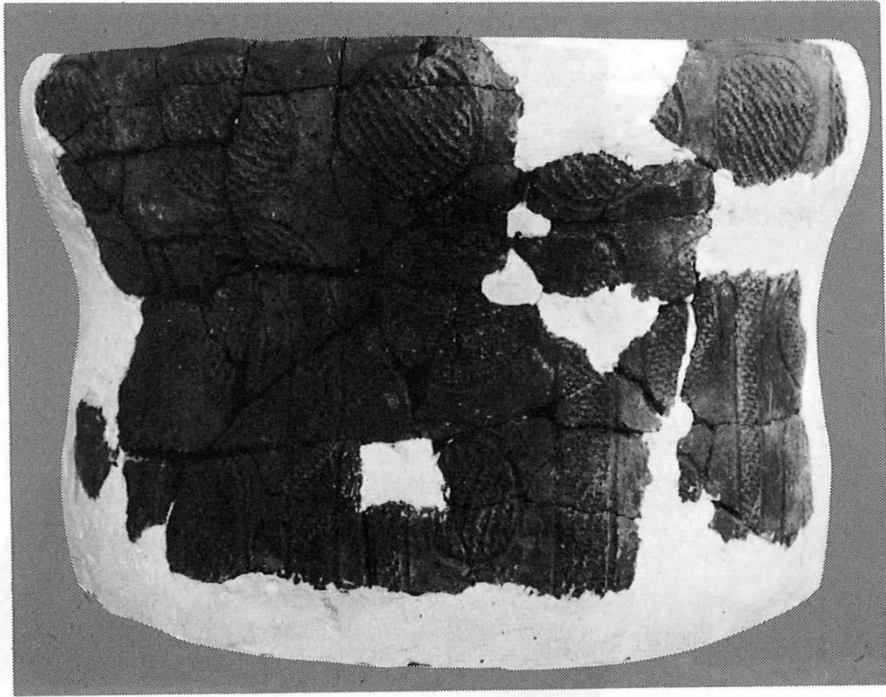
(C) 土器



(D) 石 斧



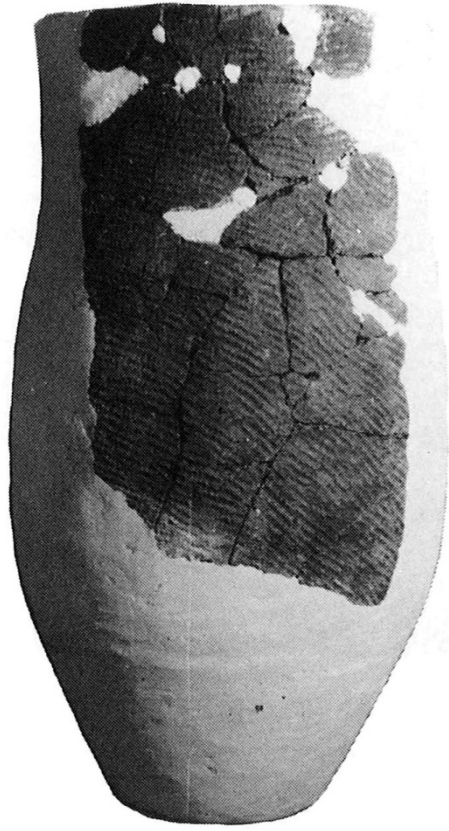
(E) 土 器



(F) 土 器



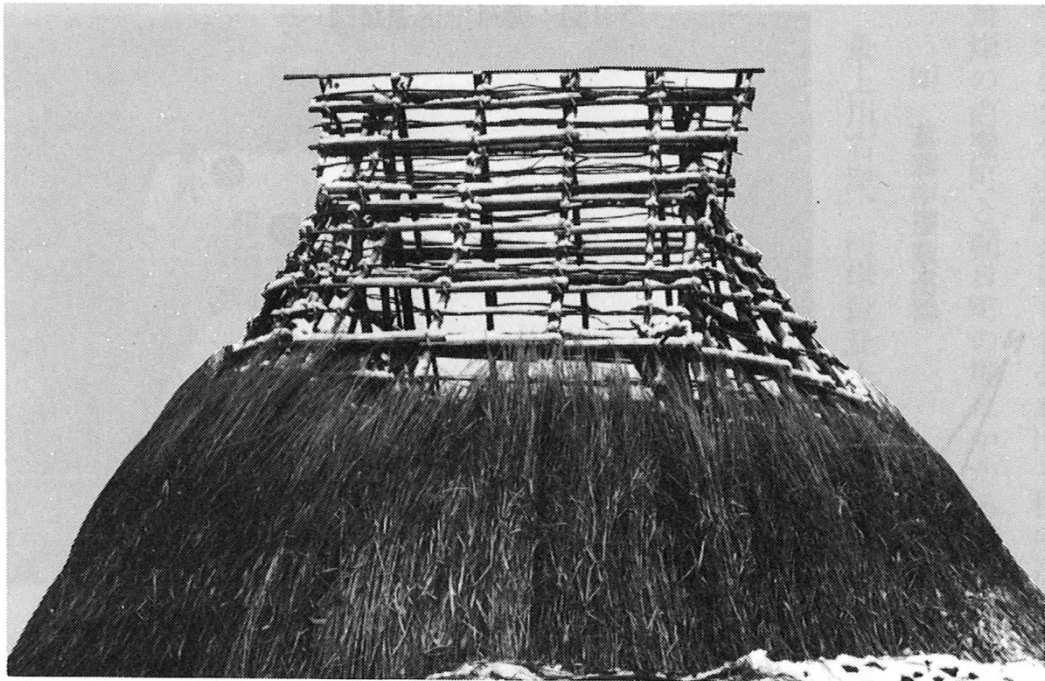
(G) 土 器 片



(H) 土 器



(I) 土 器 片



(J) 復元住居

どである。

遺物の中で形の整った石器は皆無となっているが、郷土史家や小・中学生が完形石器を保持しているのが、他の遺跡同様石斧・石鏃・石匙・石べらなどは相当あったと思われる。

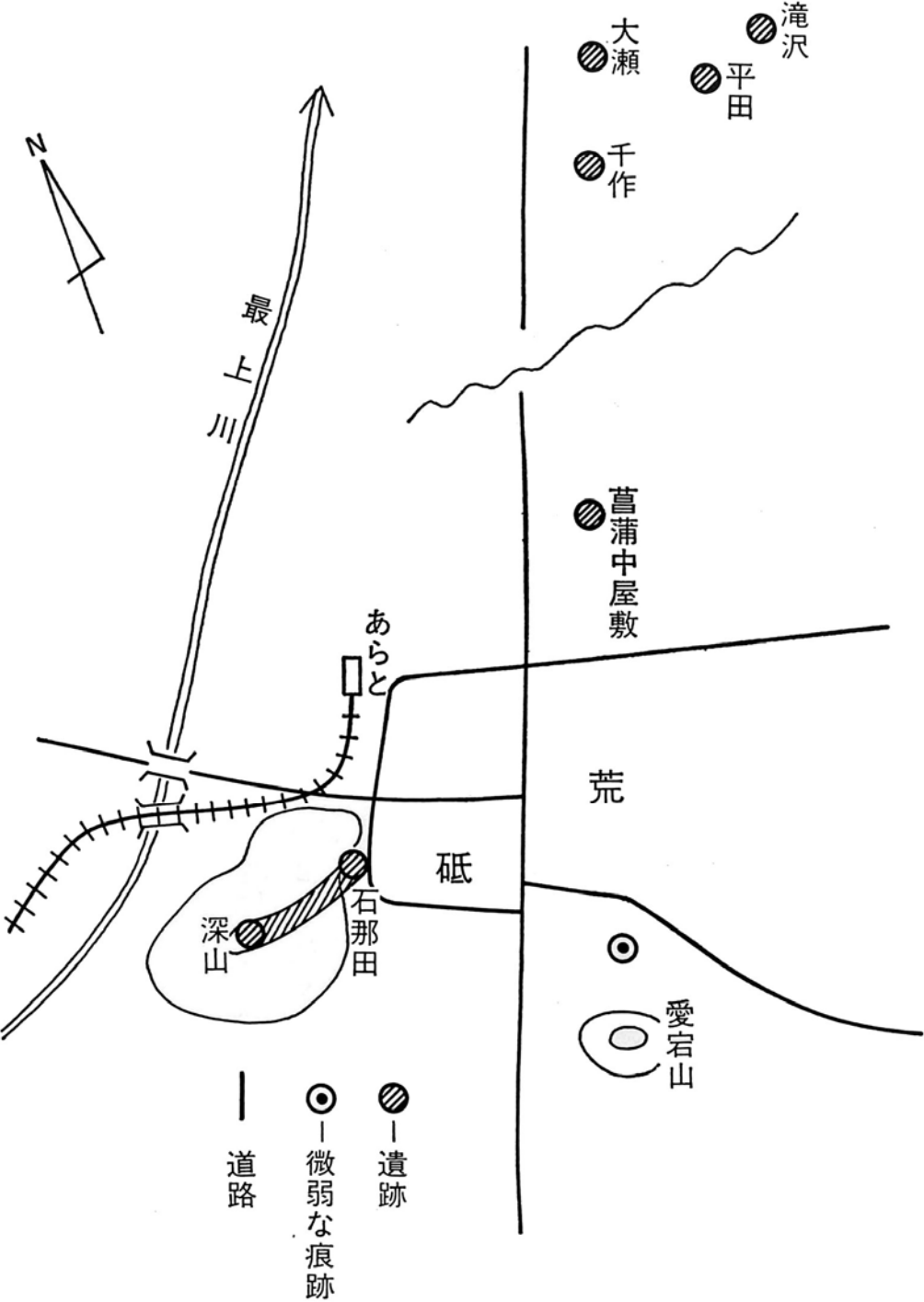
地 荒 区 砥 荒砥地区の遺跡は深山丘^{しんざん}〔石那田・深山〕の二つの遺跡と、最上川右岸の河岸段丘に併列する遺跡と

に分けられる。このうち石那田、深山、菖蒲中屋敷の各遺跡は遺物の数、種類共に豊富であり、特に石那田遺跡は荒砥高等学校敷地整備の際に発見され、山形大学によって発掘された遺跡である。この外の遺跡〔下山以北の最上川添〕は、遺跡としてよいのかどうか疑問な程痕跡の稀薄などところである。

(1) 大瀬・平田・千作の遺跡

最上川は菖蒲附近で急に狭溢となって北進する。その右岸に千作・大瀬があり、大瀬より約一キロメートル谷あいを入ったところに平田がある。大瀬・平田・千作共に頁岩石片の数片を採集できたに過ぎないところで

第31図：荒砥地区遺跡図



あつて、今のところ遺跡として名をあげる程の遺物がないのである。今後の調査に待つところが大きい。尚、昭和四十九年に対岸の白鷹町と朝日町の境にかかる橋^{〔橋境〕}工事の際土器が出土している。

(2) 菖蒲中屋敷遺跡

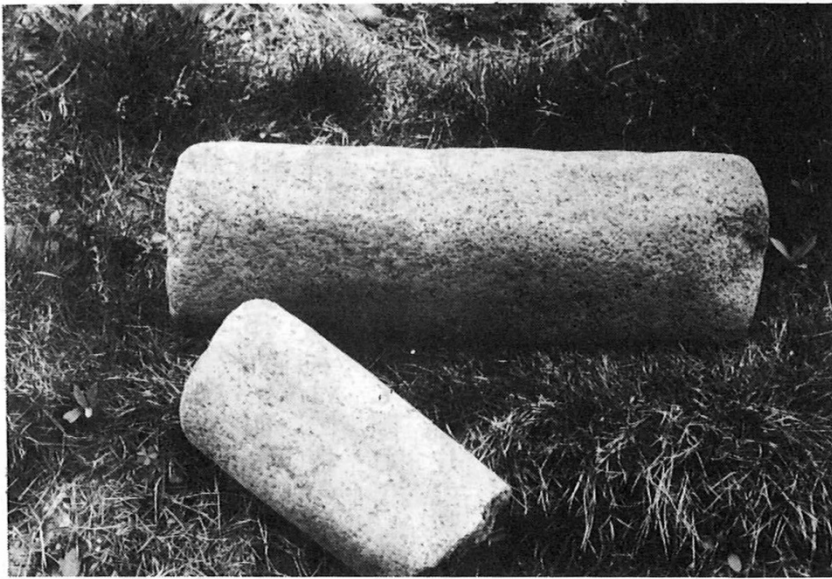
最上川右岸、河岸段丘上の遺跡である。標高一九〇〜二〇〇メートルの等高線のところで、主なる遺物は国道

改修に伴う削土の際の出土である。縄文中期遺跡で石棒（摺用）
二、土器片 五、石鏃 一、石匙 四、石皿（裏面は凹石として利用）一、石皿 一、三脚石？
〔これは今のところ用途不明で白鷹町内では一個だけである〕がある。

(3) 石那田遺跡

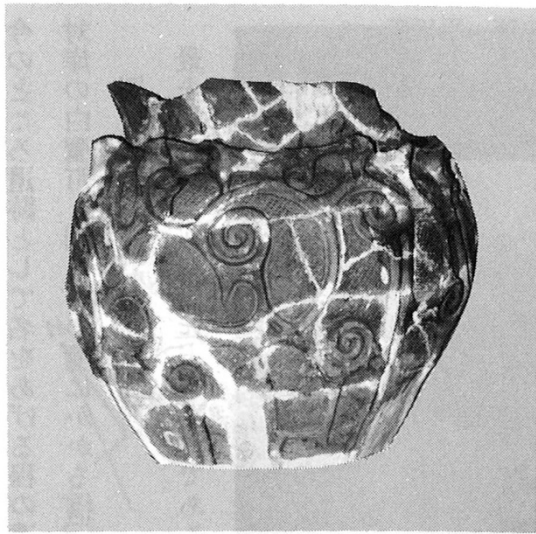
石那田遺跡については、『荒砥町誌』に詳細が載っているの
これを要約する。

昭和二十六年八月、荒砥高等学校校舎改築に当って整地の最中、土器片が出土したことによって知られた。昭和二十七年、二十八年に山形大学教育学部歴史研究室によって発掘調査された。遺跡の規模は大きい、特に調査の対象となったのは建築整地の関係で、一辺一六メートル程度の方形であつた。地層は上から表土三〇センチメートル、その下に遺物包含層二〇センチメートル、その下は赭色粘土層である。遺物は地圧によって崩壊しているが、直立した姿のものが多かつた。出土遺物としては磨製石斧 一、

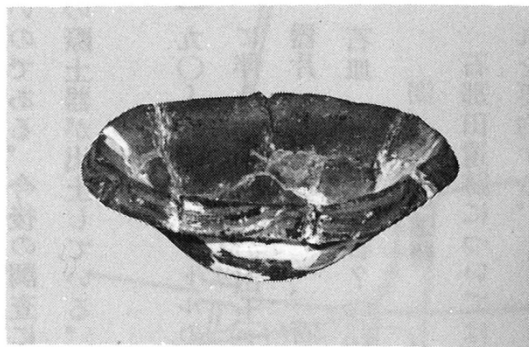


第32図：石棒（中屋敷遺跡出土・高橋運七氏蔵）

小形打製石斧一、石鏃 二、石匙〔横縦〕各一、土器 破片は相当多数であるが、原型推定できるものは深鉢形土器三、浅鉢形土器 二、円筒類似形 二、土偶 三、炉址 二、貝殻 少量である。これら土器のうち、深鉢形土器と浅鉢形土器が山形大学において復元保管されている。深鉢形土器は、高さ三七・五センチメートル、口径三三センチメートル、胴径四〇センチメートルで、地縄文に渦巻を粘土紐貼付したものである。浅鉢形土器は口径三三センチメートル、高さ九センチメートル、底径九・四センチメートル、口唇部に蕨手文が見られる。土偶は頭部一個、胴部二個である。出土品のうち特に注意すべきは二種の炉址である。その一つは、七個の河原石を使用した径三二センチメートル程の円形炉である。他の一つは少し離れて、八〇センチメートル×九五センチメートルの方形炉で、河原石で作り内部に土器片を敷き並べてあった。土器片の敷設面は炉囲石よりやや低く、赤土面より少し高い。



第33図：(A) 土器・石那田遺跡 (山形大学)



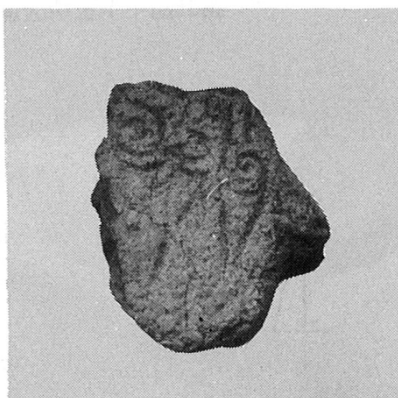
(B) 土器 (山形大学)

遺跡は縄文中期に属し、更に限定すればそのうちの後半大木 8a・8b・9 式に併行するものである。荒砥高等学校から深山しんざんにかけての台上全般に遺物が見られるが、同時代のものと推定され、土地の人々によって所蔵されているものもたくさんある。

(4) 深山遺跡しんざん

二つの突瘤をもつ深山丘のうち、南

西丘にある遺跡であって(3)と同遺跡とした方がよいのかもしれない。その頂上附近で遺物の採集が出来る。土器片、石鏃、石匙などであって縄文中期の遺跡とされている。尚この丘の西南部から、後述する〔本章第四節第4項〕弥生式土器の出土をみたという。



第34図：土偶片・深山遺跡
(高橋竹松氏蔵)

十王地区

十王地区の縄文遺跡は最上川右岸地区の中では、比較的集中している。その時期区分も前期的特徴をもつものから中期・晩期と長期にわたっている。

十王地区は白鷹町内で最も雪の少ない地域であって、現在より二〜三度も気温が高かったといわれている縄文時代には、当地方としてはやはり住みよい土地であったのだろうか。その中でも、滝野方面から流れてくる川〔上荒砥川〕と萩野方面から流れてくる川〔萩野川〕の合流点から下流兩岸は、川の幸を利用して生活するには好適の場所であったと推測される。大平山の一部にある愛宕

坂東遺跡は、十王地区としては特別で高所遺跡である。

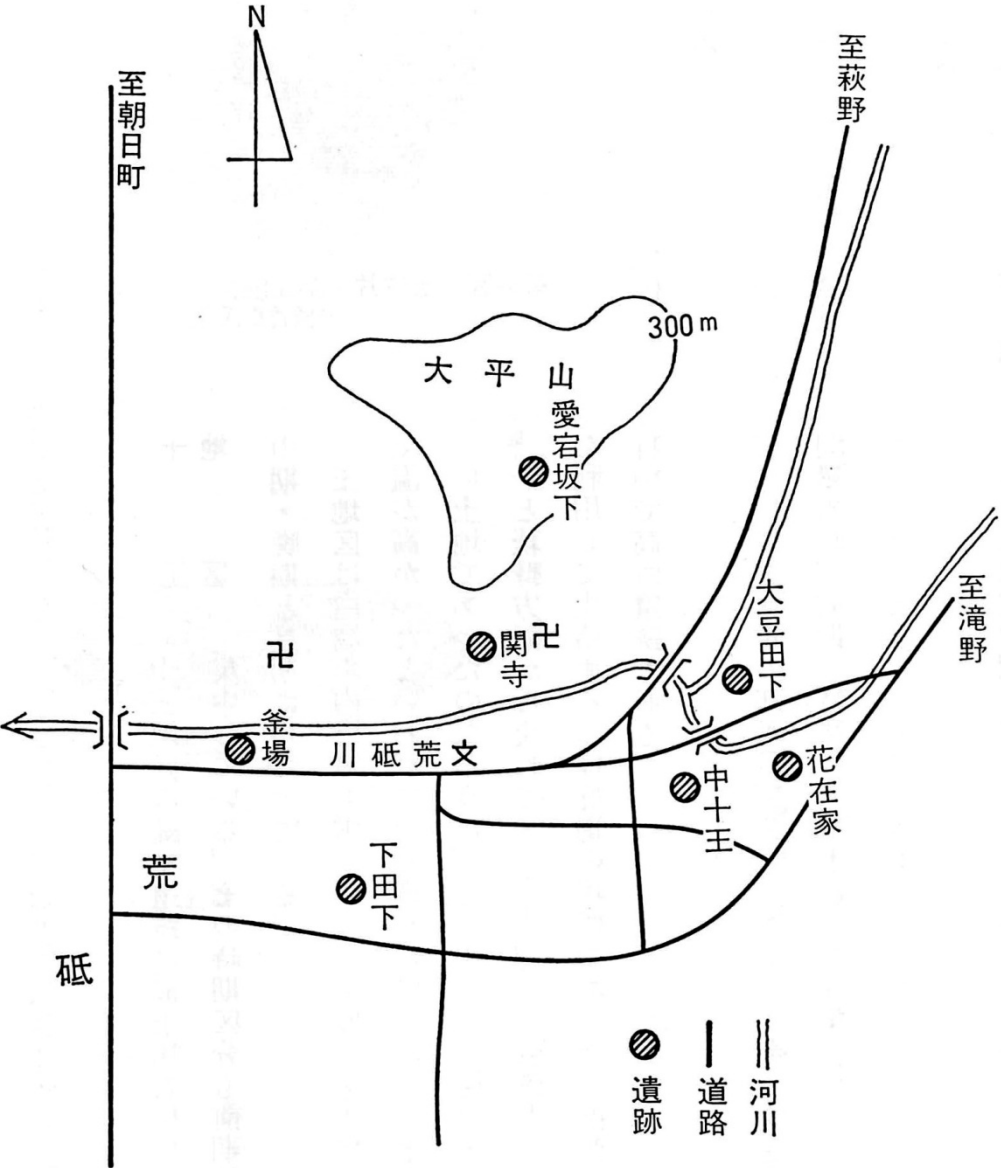
(1) 愛宕坂東遺跡

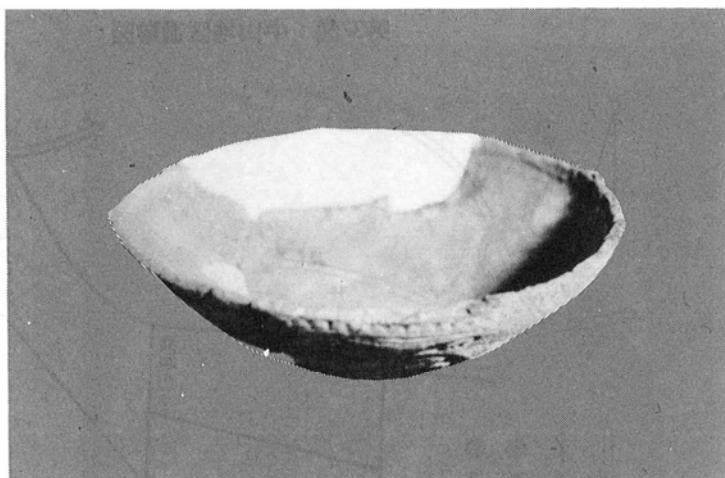
標高三七三・六メートルの大平山の一角、三二〇メートルの高所〔大平山のうちでは凹部にあたる〕にある。今では遺物の表面採集もできないような状態であるが、遺物が発見された開墾当時、前期の特徴のある土器片を採集したという。非常に狭い谷間で最近の採集では有茎石匙 一、土器片 七であった。土器片は中期のものばかりである。

(2) 大豆田下遺跡

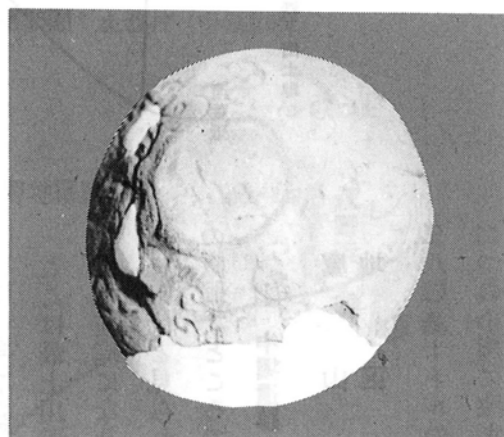
十王地区の中では最も遺物の豊富な遺跡であり、且縄文中期・晩期・土師器の時代に重複した遺跡である。こ

第35図：十王地区遺跡図





第36図：(A) 土器・大豆田下遺跡(原田三郎氏蔵)



(B) 底部

こは滝野方面から流れてくる川と萩野方面から流れ出る川との合流点の突角部にあつて、等高線二二〇メートル前後のところである。表面採集できた遺物としては縄文土器片多数、石匙 一四、有茎石匙 一、スクレーパー二〇、石鏟などである。尚、この地より完形に近い縄文晩期の浅鉢が出土している(第36図)。この土器は直径二四センチメートル、高さ七・五センチメートルのものである。土師器、須恵器の出土については古墳時代【第三章 第一節】のところで述べる。

(3) 中十王遺跡

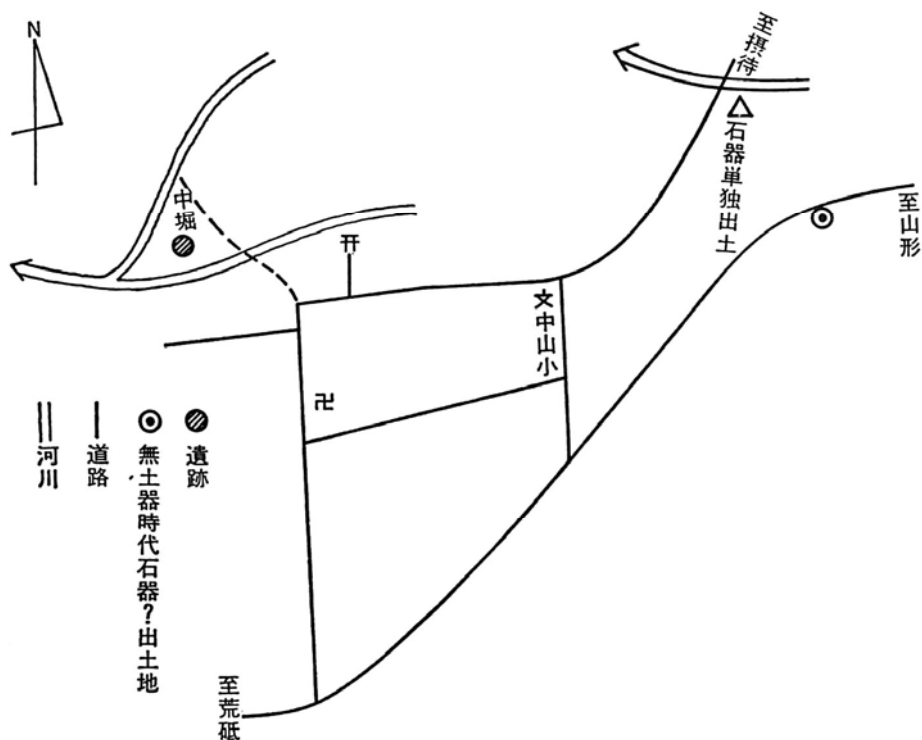
この遺跡は(2)大豆田下遺跡の南方対岸になり、縄文中期の土器、石器、土師器【第三章 第二項】の出土をみている。

(4) 花在家遺跡

この遺跡は(3)中十王遺跡の集落範囲に入るであろうか？縄文中期の土器片が採集されているところである。

(5) 下田下遺跡

第37図：中山地区遺跡図



この遺跡の出土遺物は今のところ微弱であって、主に石器の出土をみている。十王地区平坦部のほぼ中央で、等高線二一〇メートル前後のところである。

(6) 関寺遺跡

この遺跡は関寺山〔大平山の
の一部〕の南斜面にあつて、荒砥川の右岸になる。畑作時に遺物の出土をみたのであるが、現在では表面採集はできないところである。縄文中期土器片である。

(7) 釜場遺跡

ここは最上川河岸段丘と見なされるところである。荒砥川左岸になり等高線一九〇メートルほどの所で縄文時代と見られる石器が表面採集されている。痕跡の微弱なところである。

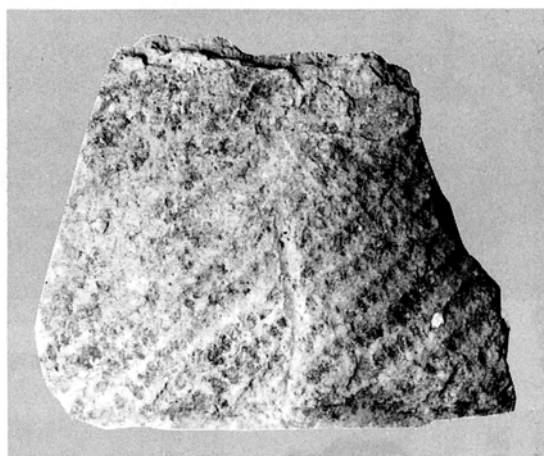
(1) 中堀遺跡

中山地区 中山地区の遺跡は今まで知られたところでは、中堀遺跡だけである。標高三

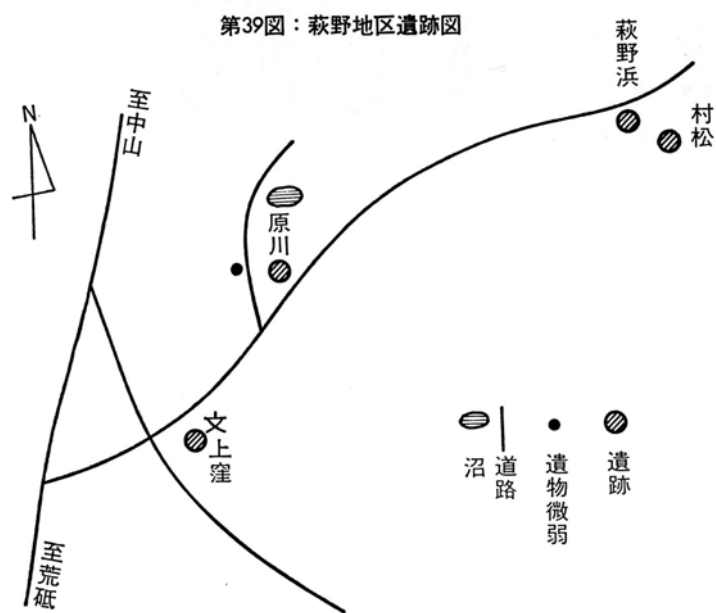
八〇メートルの等高線のところで、大瀬方面に下る二つの小川に挟まれた台地である。採集遺物は土器

片 一九、土器底部 一、搔器 二のみであった。中山の遺跡は、他にも有るものと思われる。萩野の村松台地（五六〇メートル）や、白鷹山東側中腹の獄原（六四〇メートル）のような高所にも遺跡はあるので、綿密な調査をすれば必ず発見されるだろう。

その後の調査で、中山と摂待の境〔中山分〕で石ベラの単独収集があったが、遺跡とするにはいたらない。



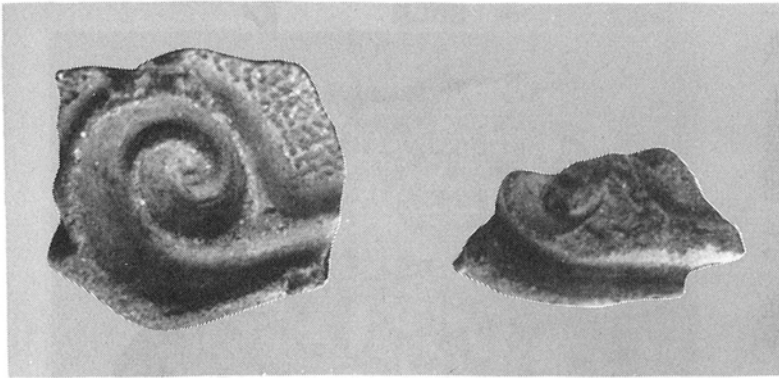
第38図：土器片（中堀遺跡）



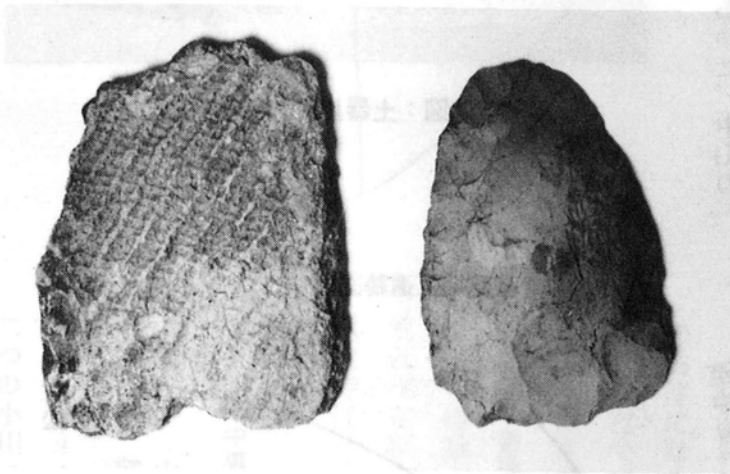
第39図：萩野地区遺跡図

(2) 上窪遺跡

ここの遺跡は、元鷹山中学校敷地整備の際発見されたものである。遺物は萩野小学校に保管されているが、他の遺跡の遺物を混在し、かつ調査当時のものは失われている。縄文中期の遺物で打石斧、石匙、刃器などである。三〇〇メートルの等高線に在る。



第40図：土器片（原川遺跡）



第41図：土器・石器片（萩野浜遺跡）

(3) 原川遺跡

萩野小学校東北方約七〇〇メートル附近、温水貯水池の南端で標高三六〇メートルの等高線のところである。採集できた遺物としては土器片は少なく二、亀ノ子形搔器 一、搔器 一〇などである。

(4) 萩野浜遺跡

終戦後の開拓入植地であるが、現在は全戸移転している。標高五二〇メートルの等高線の附近である。遺物としては、昭和三十七年の調査の時に前期的特徴をもつ土器片が見つかっており、その後の採集では土器片 三、打石斧

一、搔器 一〇、鋸状刃器 一などとなっている。縄文中期の遺跡と見られる。

(5) 萩野 村松遺跡

萩野浜遺跡に続く台上で、標高五六〇メートルの等高線附近の緩傾斜台地である。地質は表土が浅く、下は赤土である。採集できた遺物は土器片 九、石ベラ 一、搔器 六、三角尖頭器二などである。ほとんどが煙草畑となっている。

(6) 滝野 村松遺跡

萩野村松遺跡の西方で、同じ台地傾斜面の末端部にある。採集遺物は縄文中期の土器、石器とされている。

(7) 針生 滝沢遺跡

この痕跡は極めて微弱であって、表面採集に於いて石器数片を見る程度である。遺跡と呼ぶには、尚調査を要するところである。

地 東

区 根

東根地区の縄文遺跡は標高二九三メートルの太郎山の山裾東

北部から南部にかけて集中しており、次いで思い川上流の杉沢

地区にある。この地区で特記しなければならないのは東根小学校西部平地にある岡ノ台遺跡と、標高三〇〇メートル附近の高所にある浅立八カ森遺跡である。岡ノ台遺跡は縄文遺跡の地形としては興味深く、痕跡が顕著であればきわめて価値の大きいところである。金池遺跡については後述するように、完形土器の掘り出されたところで、縄文中期末の特徴を見せる器形である。



第42図：石器（滝沢遺跡）

(1) 杉沢 仲小路遺跡

杉沢地区を流れる思い川兩岸には数カ所遺跡があったらしいが、現在では仲小路遺跡と下在家遺跡がはっきりしている。仲小路遺跡の遺物は縄文中期と見られる土器片〔少量〕と石斧二、石槍二、石ベラ二がある。

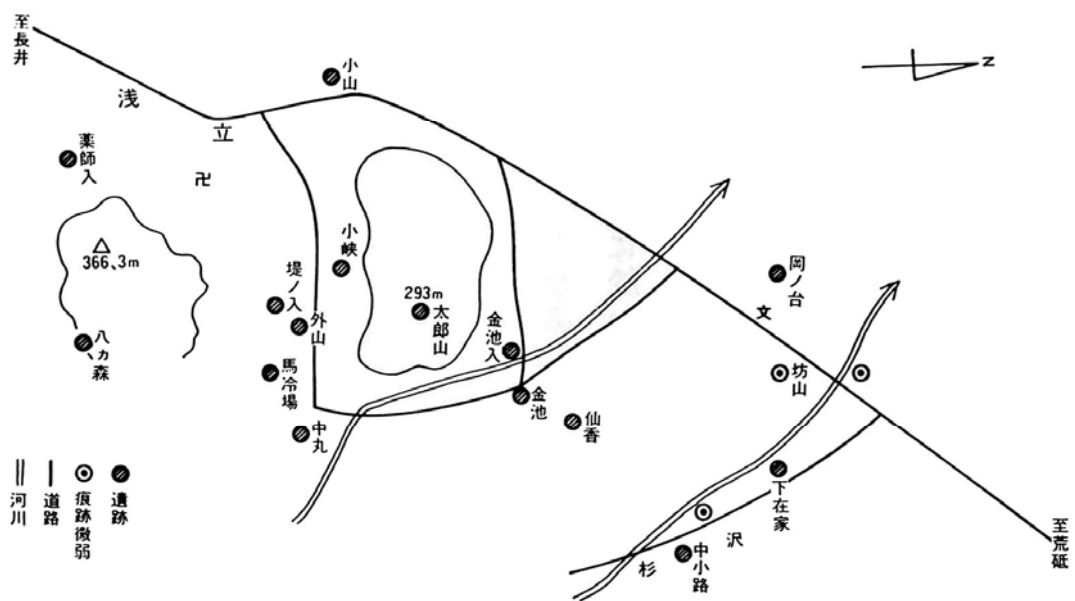
(2) 下在家遺跡

表面採集であるが、打石斧一と石ベラ一が見られる。現在は田になっているので、遺跡として確めることはできない。杉沢地区の遺跡は思い川をはさんで兩岸にあり、他に磨製石斧三、石ベラ一〇、石匙一、石鏃一が発見されている。収集の場所は不明である。

(3) 畔藤 仙香遺跡

この遺跡は等高線二〇〇メートル附近のところ、縄文中期と見られる土器片、石器の出土をみている。隣接して金池遺跡があるので、これと同時期と考えられる。

第43図：東根地区遺跡図



(4) 畔藤（小山沢） 金池遺跡

仙香遺跡に南接する等高線二〇〇メートル附近で、個人の宅地である。以前から耕作、整地などの際に土器片、石器などの出土をみていたところであるが、昭和四十八年春、天・地・返・し〔表土と中の土を
入れかえる〕の作業の際完形土器が掘り出された。地形は耳堂川右岸の段丘上で、対岸の金池入には広範囲に遺物をみる金池入遺跡がある。

(5) 畔藤（小山沢） 金池入遺跡

耳堂川左岸で対岸には完形土器の出土があつた金池遺跡がある。この遺跡は川岸から山裾まで広い範囲に遺物

を見る。出土遺物で採集されたものは土器片が主であ

るが、耕作時には頁岩石片を多数見るといふ。山裾に

道路が作られているが、削土面に貯蔵穴らしいものが

あり土器片が採集された。時期は対岸の金池遺跡と同

じく、縄文中期末のものとしてされている。

(6) 畔藤（小山沢） 中丸遺跡

この遺跡は、耳堂川に添う小山沢集落の最奥部にあ

る。現在遺物の拾集は極少であるが、縄文中期の土器

片、石器がある。



第44図：土器・金池遺跡 高さ52.5
センチメートル（吉田善一氏蔵）

(7) 畔藤 太郎山遺跡

第二次大戦中、燃料として松根油をとるため松の根を掘った際に打石斧などの石器が発見された。標高二九三メートルの独立した山である。

(8) 広野 岡ノ台遺跡

東根小学校北西部で、海拔一八五メートル余の平地である。白鷹町ではただ一カ所河岸段丘より低部であって、縄文遺跡としては特殊である。採集された遺物は縄文晩期のものであるが、遺跡としての遺物なのか、何等かの理由に因って遺物が移動し、この地で発見されたものか疑問の残るところである。

(9) 浅立 小山遺跡

浅立の北端、丘の突出したところで等高線二〇〇メートルの最上川右岸河岸段丘と見られるところである。土器片の採集は無く石器、石片のみであって縄文中期遺跡と考えられている。

(10) 浅立 馬冷場遺跡

この遺跡は中丸遺跡の西に接する遺跡で、遺物の土器片の中に縄文後期と見られるものがあり、中期から後期にかけての遺跡である。

(11) 浅立 堤ノ入遺跡

馬冷場遺跡に西隣する遺跡で、縄文中期の土器片の採集されるところである。

(12) 浅立 小狭遺跡

遺物採集の稀薄な遺跡で、僅かに土器片をみる。

(13) 浅立 薬師入遺跡

浅立南部にあつて、僅かながら石器の出土がある。



第45図：土器（菊地藤兵衛氏蔵）

(14) 浅立 八カ森遺跡

浅立に東接する標高三六六・三メートルの高地の東凹部、約三〇〇メートルの等高線附近で開懇の際土器片、石器の出土があり、縄文中期の遺跡である。

以上の外、堤ノ入遺跡か八カ森遺跡か出所があいまいになってしまったが、完形に近い縄文晩期〔工字文様〕の小形壺形土器が出土している（第45図）。